
腐敗都市・麻帆良

富屋 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐敗都市・麻帆良

【Nコード】

N8944U

【作者名】

富屋 要

【あらすじ】

『麻帆良学園都市』。埼玉県麻帆良市のほぼ全域に相当する一大学園都市である。しかしその内実は、教育委員会・警察・裁判所・市議会までもが、テロリスト集団にしてカルト教団『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』により支配され、不正と汚職にまみれた腐敗の街だった。これは、法治国家・日本の警察官達の、カルトテロ組織との戦いの物語である。

まえがき（諸注意）

この作品は、赤松健の『魔法先生ネギま！』に登場する『関東魔法協会（麻帆良学園都市）』を法治国家・日本が見た時、どのような組織と映るのか、の思考実験です。

結果として、『立派な魔法使い』敵性の強アンチ・ヘイト色の強い作品になりました。

「たかがフィクションに、現行法持ち出してツッコミ入れるなんて、バカだろ。普通に犯罪者集団になるに決まっているだろ。バカじゃね？」と言う方は不快になると思います。

最後に。

以下のシーンを期待していると不発になります。

- ・オリ主、転生、トリップ、原作知識、チート、無双。
- ・冗長（半話以上）な戦闘。
- ・無駄に熱い説教。お話。
- ・原作沿いイベント。
- ・原作キャラの恋愛フラグ、ハーレム。
- ・ネギ断罪、フルボッコ。
- ・魔法使い達の遵法精神、合法で『立派』な言動、違法行為への忌避と自省。
- ・良心・良識・道德・国益・法律的に綺麗な近衛近右衛門。

超どん亀更新になりますがお付き合いください。

プロローグ 麻帆良事件・表

『麻帆良事件』

二〇〇三年四月下旬、麻帆良学園都市を実効独裁支配していた麻帆良学園学园长、及び部下の教職員と生徒合わせ百余名が逮捕され、日本国憲法が制定されて初の『外患誘致罪』『外患協力罪』を適用、主犯格の五名が有罪、死刑判決を受けた事件である。主犯格の一部は海外へ逃亡、現在も国際指名手配中だ。

これは同年に発生したアメリカの『ジョンストン事件』や、ウェールズの『一村失踪事件』『メルディアナ事件』他、世界先進国で同様の事件の先駆けとなったもので、その背景にあったのは、世界規模のカルト教団『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』の存在と、教団関係者による違法行為の数々に対するアンチテロ活動だ。

「世のため人のため、正義を成す人間となる」と言う耳に心地良い教義でありながら、教団の实体は、教団の定める『正義』を示す暴力行為の肯定と、その過程での国家の法の否定、そしてそのための教育と訓練だ。

事実、『メルディアナ魔法学院』を名乗ったウェールズの非認可校では、ウェールズ教育省の定める教育プログラムの半分も履修されていなかった。それどころか、十に満たない子供に火器の使用法や射撃訓練、薬物の製法を教え、教育法では十六歳までを義務教育と定めているにも関わらず、十二歳で卒業させた後は『修行』を称して労働義務を強いていた程だ。教員は全て教団の手配した人員で構成され、ウェールズの正式な教員免状を取得している教職員が皆無だったのは余談である。

『一村失踪事件』に到つては、一九九七年一月、教団員から成る人口百人弱の小村が一夜にして全焼、当時三歳の幼児一名を残し、村民全員が行方不明になると言う大事件を、教団内のいざこざが理由として、公の目から隠蔽してきたのだ。

ここまで極端な隠蔽は滅多に無いにせよ、このような教団の暴挙は枚挙にいとまがなく、現代の法治国家からすれば見逃せるものではない。二〇〇一年のアメリカで起きた『同時多発テロ』は先進国各国では記憶に新しく、第二第三の多発テロを警戒した各国司法機関で、教団排除の気運が高まったのは当然の流れだろう。

その気運は、日本でも同じだった。

ウエルズや他の地での教団は、隠れ里のように一般社会から隔絶されたコミュニティを形成していたため、『一村失踪事件』も隠匿されてきたのだが、日本で最大級を誇る学術都市『麻帆良』では事情が大きく異なっていたのもある。

地下組織を自認していた教団は、麻帆良事件主犯の近衛近右衛門を長に据え、法人格を持たない『関東魔法協会』なる組織を設立。近右衛門の学園長の立場を利用し、教団員への便宜を色々と取り計らっていたのだ。否、教団の影響力で近右衛門を学園長に据えたと言ふべきだろう。

近右衛門の教団員としての任務は、教団から派遣された不法滞在外国人に虚偽の戸籍を与え、教員として雇用。選別した一部の学生を教団に勧誘、戦闘訓練を行なうのを黙認、否、率先して指導する等だ。その際に発生する器物破損、人身傷害等の処理も含まれる。

その見返りが、近右衛門個人の口座に毎年振り込まれる数十億、時に百億円を越える活動資金だった。麻帆良学園の運営予算として

計上されている額の数倍もの資金は、幾つもの海外口座から振り込まれていて、この一点だけでも、麻帆良学園都市が海外の組織による侵略済みであり、教団の隠れ蓑として機能していた事が伺える。

その上、麻帆良学園都市の司法機関、つまり警察や裁判所等は、潤沢な資金と教団の影響力の前に機能停止させられていた。麻帆良事件と前後して、麻帆良市の警察官や弁護士・検事が大量に検挙され、麻帆良簡易裁判所の裁判官全員が弾劾裁判の後、罷免された事からも事態の深刻さが知れる。

機能不全に陥った司法機関のうち、警察の代役を務めたのが、教団員の教師と生徒達だ。

彼らは治安維持の名目の元、銃器・刀剣類を所持し、市内の不穏分子とたまたま敷地内に迷い込んだ市外住人へ、武力による鎮圧・逮捕・拘束・監禁・尋問を行っていた。尋問の際には何らかの薬物が使用され、違法に拘束された被害者の過半数は記憶障害すら起こしている。

そして、教団の主観で『犯罪者』に仕立て上げられた被害者に判決を下し、刑罰を課すのは、麻帆良支配者の近右衛門だ。検事や弁護人は無く、教団関係者からの証言と言う一方的な裁判制度である。

仮に無罪とされても、尋問に用いられたのと同じ薬物で記憶処理され、有罪の場合、悪ければ教団『本国』へ送致、改めて裁判にかけられる。行方不明者の一部は、そちらへ送られた事が確認されているものの、他の大多数の行方不明者の消息は不明なままだ。また、『本国』へ送致された拉致被害者の救済の目処も立っていない。幸運にも保護された被害者の中には、教団の定める『滅ぼすべき悪』認定され、本国送致の後に処刑される予定だった女子中学生もあり、

処刑を免れる替わりの条件として、麻帆良に監禁され、強制的に治安維持に狩り出されていた。

無論のこと、日本国の法律に照らし合わせれば、学園長が許可したからと言って教師が警察権を得られるはずがなく、学園長だからと言って裁判権が得られるものではない。そもそも教師（自称警察）と学園長（自称裁判官）が結託している時点で、一万歩譲っても司法組織として機能しているとすら言えない。学園長を含めた教師陣に、司法権が認められていないのは、言わずもがなだ。

このような無法が常態化していたのが麻帆良であり、市外から派遣された捜査員が頭を抱えたのもやむなしだろう。

捜査が進めば進む程、次々と出てくる違法行為の数々に、五月中旬に『国際的な組織犯罪の防止に関する国際連合条約』が国会で承認されたのを機に、『関東魔法協会』は一九九五年の『オーム真理教』に続き、『組織的な犯罪の処罰及び犯罪収益の規制等に関する法律』の適用を受け、解散命令が下されたのだった。

これにより、『立派な魔法使い』教団は日本国内での地盤を失い、同時に学園としての機能も大きく喪失した。「カルト教団の隠れ蓑」と言う風評被害の他、戦後六十年に渡るニセ教師の雇用による数万人規模での単位不足学生の発生と学位の取り消し、それらによる麻帆良ブランドの価値の暴落、私立学校に義務付けられている最低でも理事五人と監事二人の役員の不備など、学校法人として致命的な問題が山積みで明らかとなったのだ。

そこへとどめとなったのが、文部科学省からの組織改革と単位不足学生の救済案の提出命令だ。学園長を始め多くの教員が逮捕または強制退去となり、本来運営に関わるべき理事が居らず、逮捕され

なかつた教師も多くが退職、『関東魔法協会』の解散による学園の運営資金の不足等の状況で、学園の改革を計画できる人員がいるはずもない。

結局、改革案の提出は出来ぬまま、同年十二月下旬、文部科学省は麻帆良学園に対し解散命令を発令。

……二〇〇四年三月末日をもって、麻帆良学園は明治中期からの一世紀以上に渡る歴史に、幕を閉じたのだった。

ブローグ 麻帆良事件・表（後書き）

参考資料

赤松健作品総合研究所 『魔法先生ネギま！研究所』

<http://www2u.biglobe.ne.jp/crown/NEGIMA/index.htm>

首相官邸 『私立学校の位置づけについて』

<http://www.kantei.go.jp/jp/kyouiku/2bunkakai/dai5/2-5siryou4-1.html>

文部科学省 『学校法人制度の概要』

<http://www.mext.go.jp/amen/koutou/shinkou/07021403/001.htm>

Wikipedia 『国際的な組織犯罪の防止に関する国際連合条約』

<http://p.ttl/QTVG>

Wikipedia 『組織的な犯罪の処罰及び犯罪収益の規制等に関する法律』

<http://p.ttl/-zdf>

Wikipedia “Education in Wales”

<http://p.ttl/j29U>

Wikipedia “Primary Education in Wales”

<http://p.ttl/icHT>

Wikipedia “Secondary Education in Wales”

<http://p.ttl/bIte>

第一話 特殊資料整理室

片側二車線、計四車線の道を走り続けた終点は、高速道路の料金所を思わせる開閉バーと、青い制服に警棒とトランシーバーを腰に下げたガードマンの待ち受ける入場門だ。

車を降り、受付にある入場申請書に所定の記入をする。所属、氏名、人数、訪問先、訪問先担当者名、用件、そして入場時間など。

企業の工場や研究所の敷地に入る手続きとしては、おかしな話ではない。大企業でなくとも、受付ブースを備えるオフィスや飛び込み営業対策に、このような手続きを踏ませるところは珍しくない。

しかし大概の場所では、敷地内に車を乗り入れるのは認めているものだ。それだけに、敷地外で車を降り、入場手続きを取らせるのは違和感を覚える。

ダッシュボードに乗せるB五版のナンバープレートと、胸に付けるバッジをガードマンから受け取り、車に乗り込む。

バーが上げられ、ようやく敷地内へ車を走らせる。

入場してすぐさま目に入ってくるのは、ブルックリン橋を彷彿とさせるゴシック調の長大な吊り橋だ。公式な全長は報告されていないが、約一キロメートルと言われている。芝浦・お台場間を結ぶレインボーブリッジの全長が七九八メートルと考えれば、その長さの一端を実感できるだろう。

これ程の橋の架けられている川の水量は豊かだ。

日本最長で知られる信濃川は、江戸時代には川幅が八四〇メートルあったと言われている。現在でこそ川幅は三百メートルあるかなにかに整備されているが、それでも平均流量は毎秒五一八立方メートル、流域面積は国内第三位の一一九〇〇平方キロメートルを誇る。さすがに日本屈指の信濃川と比較するのは酷であるにせよ、全長一キロ近い吊り橋の架かる水面の幅は、江戸時代の信濃川と較べても遜色のないものだろう。あるいは、橋のモデルの架かるイースト川か、レインボーブリッジの架かる東京湾か。

奇怪なのは、これほどの水量の川と長大な橋が、世間ではほとんど認知されていない事だ。

確かに、某所の敷地内である事を鑑みれば、認知度が低いのはやむを得ない……かもしれない。橋の建築費用にしても、その敷地を管理する組織が全額負担しているのならば、噂の端にもかからない……かもしれない。

でも考えてみよう。

これ程の水量だ。地理的には利根川水系の本流の一本と考えられる。が、それを示す資料は一篇もない。

ダム建設の話も一度ならず出ただろう。が、明治時代まで遡っても、ダム建設が計画されるどころか、検討された形跡すらない。関東圏の水不足の深刻さは知れ渡っているのに、だ。

これ程の規模の川となれば、一級河川の指定を受けているはず。が、一級河川リストにこの川の名前は無い。二級河川、準用河川ですらなく、河川法の適用を受けない普通河川として登録され、管理者は地元の市役所になっている。

ブルックリン橋を模倣した橋も、おかしな点が多い。

第一に、橋の竣工年だ。何年何月に定礎を築いたのか、その情報は橋のどこを見ても刻まれていない。

第二に、橋の建設をどこが許可したのか、だ。一キロ近い長さからして、板切れ一枚渡して作れる代物でないのは明らかだ。となれば、建設の許認可は国土交通省になる。ところが許可印どころか申請書すら提出されていない。つまりは、無許可での建設と言う事なのだろうか。

第三に、建設費用の出所だ。川を管理する市役所が捻出したと考えるのが順当だが、市が公開している範囲でこの橋の建設費は計上されていない。

先に出たレインボーブリッジの建設費は一二八億円、建設には六年かかっている。さすがにこれ程の費用がかかっていないにせよ、一大事業であるのは間違いない。到底一私企業や一組織が、敷地のちよつとした整備の名目で捻出できる金額では済むまい。

仮にレインボーブリッジの半分の費用と時間で建設できたとしても、その間における付近への経済効果は莫大だし、その影響が市の年次報告書に載らない筈がない。

そして最後が、これ程の橋の建設をどこが請け負ったのか、だ。河川の管理者が市町村にあるからには、橋の建設は公共事業だろう。公共事業には競争入札が義務付けられているのだが、調べられる範囲で調べた限り、競争入札が行われた形跡がない。

『談合』……発注者と業者が結託し、競争を参入させなかった。そう疑ってしまうのは、うがち過ぎだろうか。

談合の可能性に限らず、この吊り橋の建設に疑惑を持たず持つ程、不明瞭な部分が浮き彫りになってくる。この橋の建設に関わる計画、予算、入札、資材、搬入、人件費その他、一切合財の資料の存在が確認できないのだ。少なくとも、合法的に閲覧できる資料の範囲では。

ここまで辻褄の合わない現象を目の当たりにすると、ここが本当に日本国内なのか疑わしくなってくる。

しかし、忘れてはいけない。まだゲートをくぐったばかりだと言う事を。

異常な光景はまだまだ続く。

ここは埼玉県麻帆良市、別名『麻帆良学園都市』。

そして橋の名前は『麻帆良大橋』。

麻帆良学園都市の数少ない入口だ。

文書作成ソフトで作った文章をコピーし、『新規記事作成』で開いたスペースにペーストする。

『確認する』ボタンをクリック。

次いで現れた『記事確認ページ』に、今し方ペーストした文章が現れる。

誤字脱字の有無を確認し、『保存する』ボタンをクリック。

「保存は完了しました」のメッセージが出たら、自ブログサイトを開く。

『俄か旅人漫遊記』が、ブログのタイトルだ。

タイトルの下には、簡単なメッセージが添えられている。

「当ブログの記事が、当方の許可なく削除される事態が発生しています。運営会社に問い合わせたところ、運営会社では削除行為は行っていないとの確認を取っています。不正アクセス行為は犯罪です。警察に通報しました」

本来ブログ内容を簡単に説明する場所にあるのは、そんなやや剣呑な一文だ。

画面を僅かに下方へスクロールさせ、メッセージの下、『最新の記事』で先程の記事が掲載されているのを確認する。

一通り記事に目を通し、内容の一部が欠落ないし改鼠かいそされていないと確かめた後、『プリントスクリーン・キー』と備え付けの『ペイント』機能と合わせ、画面を保存する。途切れた文章は、画面を下へスクロールさせ、その続きから画像として取り込み、保存する。

五分程かけて計四つの画像ファイルを作ったら、『俄か旅人漫遊記』のタイトルにカーソルを合わせ、クリック。

一瞬画面が暗くなり、ブログサイトの最新状態が現れる。

たかが五分程度で、状態が変わるはずがない。管理人が更新や修正を行っていないのだから、変化があるとすれば閲覧者カウンターの数位だ。

それにも関わらず、画面は一変していた。

正確には、先程上げたばかりの最新記事が、綺麗に消えていた。

ブログの説明にもあるように、何者かによりクラッキングされ、記事を消されているのだ。

またやられたか、と内心で零しながらLANケーブルを引き抜き、『プリントスクリーン・キー』と『ペイント』を使い、変わり果てたブログの画像を保存する。

今度は二つで済んだ画像ファイルの作成を終えたら、常駐ファイルアウオールのコントロール画面を呼び出す。

目立つIPアドレスは二つだけ。一つは現在使用しているアドレス。

そしてもう一つは、不正アクセスを仕掛けている無法者のIPアドレスだ。ファイアウォールのバージョンアップを何度となく繰り返し、ようやく捕まえた尻尾だ。そう簡単に逃がしはしない。

通信ログを出力し、テキストファイルで先の画像ファイル達と一緒にフォルダに保管する。

最後に、外付けハードディスクをコンピュータ本体に接続、フォルダをコピーし、すぐに切り離す。

コンピュータの電源を落とし、一連の作業は終了だ。

記事投稿から電源を落とすまでの、僅か十五分程度の一連の作業を終えると、石動大樹（いするぎ・だいき）はふうと息を吐いた。社会人としては余り褒められた態度ではないが、幸いこの職場でそれを咎める先輩や上司はいない。

今年で二十三歳になる大樹にしても、社会人五年目にもなればその程度は理解している。うるさい上司がいるなら、態度を控えるだけの要領も弁えている。

「今日の分、終わりました」

そう報告する大樹は、とても二十代には見えない。私服なら高校生と間違えられてしまう童顔の上、リクルートスーツを思わせる濃紺のスーツと、いかにも新社会人然の着こなせていない様も、見た目の若さに拍車をかけている。一カ月か二カ月、地方の研修所で合宿させる大手企業を除けば、新社会人達からはそろそろ固さが抜け始める時期なのだ。

先輩達が出かけて閑散とした部署で、大樹の他に残っているのは、上座に座る部署長のみだ。

「そう。ご苦労さま」

答える部署長はキーボードを叩く手を休めず、モニターの陰から顔を覗かせる事すらない。ひつつめ髪の団子が、モニター越しに小さく揺れている。

と、不意に大樹の左手の空席のプリンターが、きりきりと音を立

てた。水性インクのプリンターは部署内に三台あるが、油性インクのプリンターはこれ一台だ。

「石動君。悪いけど、取ってもらえる？」

モニターの横から顔を覗かせたのは、二十代半ばのどこか妖艶さを湛える女だ。化粧は薄いのだが、元の色白さも唇の紅がやけに映える。初心うぶな学生辺りなら、色香だけで簡単に落とせそうだ。

もつとも、大樹にセクハラを避けようと言う意識以外、同じ職場の人間に異性を意識する感情是一片もない。部署内恋愛を否定するつもりはないが、仕事中にそういう感情を持ち込む未熟者でもない。

印刷された用紙を引き抜き、ページ順に並び替えた大樹は、一番上のページをちらと一瞥して眉根を寄せた。

「ようやく計画の実行ですか」

大樹がこの部署に異動してから一年、部署長の『計画』にかける並々ならぬ意気込みは、身を持って教えられている。

青写真そのものは、部署の立ち上げ以前から温めていたそうだ。そして部署の立ち上げ後に計画を立案、提出した企画書は何度となく却下されている。それでも懲りずに修正に修正を重ね、日常業務の傍ら各方面に相談や根回しをし、許可の下りたのが半年前。

その後も人材の確保や下準備に時間を費やし、ようやく日の目を見る目処が立ったのだ。

一見クールな上司が、内面にどれ程の情熱を抱いているのか、大樹には想像もつかない。

大樹からプリントを受け取った上司、橘霧香（たちばな・きりか）

は、僅かに口元を綻ばせた。

「ええ。ようやく……ね」

霧香の口元は小さく笑みを浮かべていても、目は全く笑っていない。それどころか、一枚目のトップにある『搜索差押許可状申請書』というやや剣呑な文字を、親の仇を見るような眼で睨みつけている。

搜索差押許可状、俗に言う『ガサ入れ』の時に提示する令状の事だ。『強制捜査令状』と呼ぶ向きもあるかもしれない。霧香の部署では、本来、作成するはずのない申請書だ。

『警視庁特殊資料整理室』が正式名称のこの部署では、都内百二の警察署と二五五の駐在所から寄せられた保管期間切れ間近な資料、窃盗から殺人まで各種事件の支離滅裂な証言資料や、時効となった事件の資料等、廃棄寸前資料が保管・管理されている。

確かにこれでは、捜査権を行使する機会はないだろう。

「……本当は管轄外だから、この手は使いたくなかったんだけど……」
所轄署が役に立たないから、という言葉が霧香は飲み込んだ。
大樹もそれは心得ており、怪訝そうな顔一つ見せずにいる。

警察署だけではない。市役所、市議会、家庭及び簡易裁判所、教育委員会その他諸々、街を運営する全ての司法・行政機関が、かの街では一人の人物と配下の組織に支配され、傀儡となっている。

当然、彼の息のかかった犯罪は、事件そのものが揉み消され、表に出る事はない。しかも人の出入りは厳しく管理され、内情もなかなか伝わってこない。夜闇に紛れて潜入しようとしても、訓練され

た武装集団に迎撃される。警察官と身元を明かしても結果は変わらない。

これ程の無法をまかり通し、メディアに名前すら載らないアンタツチャブルに、一地方の警察では太刀打ちできないのは、半ば道理だろう。外国から潤沢な援助を受け、その資金で市の上層部を懐柔し、購入した銃器を子飼いの部下達に支給しているのだから。

「ようやくこれで、僕はこの作業から解放ですね」

電源の落ちたモニターを、大樹は人差し指でとんとんと叩いた。証拠集めのためとは言え、ブログを幾つも開設したのは精神的に堪える。不正アクセスされ、削除されると分かっていただけに、その心労はなおさらだ。

「そうね。これ以上は不要かしら」

霧香は同意すると、申請書をめくり中身を推敲した。

「麻帆良学園大学のコンピュータから不正アクセスが行われ、ネット掲示板、ホームページ、ブログが改ざんされている。証拠隠滅の防止と証拠品の確保のため、搜索差押の許可を申請する」

要約すればこのような内容だ。その他に、大樹の作ったブログが削除された画像や、アクセス解析、IPアドレスのログ等のデータが資料として添付されている。全部で十枚を少し超える量だ。

後はこの申請書を、所轄署の担当者が所轄の裁判所に持ち込めば、ほぼ確実に令状は発行される。

……はずだ。通常ならば。

しかし所轄の警察署と裁判所は、麻帆良学園を隠れ蓑にする犯罪

者集団に完全に抱き込まれている。

『不正アクセス禁止法』違反の捜査といえども、許可状が下りるところか、申請書の提出すらしないだろう。

それは霧香だけでなく、『資料整理室』の面々及び計画に参加する他のグループも承知の上だ。だからこそその『計画』だ。

霧香の計画。

そう難しい目的ではない。

麻帆良学園都市に巢食い、教育者面した犯罪者達を燻り出し、法の裁きを受けさせる。

警察官として当然の話だ。

犯罪者達の首領は近衛近右衛門。麻帆良学園では学園長の肩書きを持つ人物だ。

そして組織の名は『関東魔法協会』。外国の政府から資金を受け、日本の領土で軍事活動を行う売国の徒の組織だ。

時に、二〇〇三年四月十五日、二十時五分。

麻帆良学園都市では、年に二回のメンテナンスが始まったばかりだった。

第一話 特殊資料整理室（後書き）

参考資料

お台場百科事典『レインボーブリッジはどんな橋？』

<http://p.ttl/-W91>

警視庁『不正アクセス』

<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/haiteku/haiteku/haiteku34.htm>

Wikipedia『風の聖痕』

<http://p.ttl/ZJjF>

Wikipedia『河川法』

<http://p.ttl/bWHC>

Wikipedia『カルテル』

<http://p.ttl/YHea>

Wikipedia『市町村道』

<http://p.ttl/kELc>

Wikipedia『信濃川』

<http://p.ttl/YQ8X>

Wikipedia『搜索』

<http://p.ttl/16Hp>

Wikipedia『利根川』

<http://p.ttl/cY31>

Wikipedia『不正アクセス行為の禁止等に関する法律』

<http://p.ttl/OScK>

Wikipedia『ブルックリン橋』

<http://p.ttl/D4-P>

Wikipedia『令状』

<http://p.ttl/4mVk>

Wikipedia『レインボーブリッジ』
http://ptl/5sJB

第二話 麻帆良大停電

三分の二に欠けた月が照らす光の下。

明かり一つ灯らない街の上空に、二つの人影があった。

十歳前後の子供が二人、一人は木の棒にまたがり、もう一人は長い髪とマントをたなびかせ空を舞う様は、どこか幻想的な眺めだ。

二人の周辺に起きる災害に目を瞑るなら、だが。

戯れる子供二人の間には、間断なく光が煌めき、氷塊が飛び交っていた。

その余波を受け、建物の窓ガラスは砕け散り、路面のアスファルトは抉れ、街灯や電柱はへし折れと、破壊の爪痕がそこかしこに刻まれていく。

無差別テロを思わせる無秩序ぶりと破壊と爆音の規模でありながら、何事かと顔を覗かせる住人が一人もいないのが不気味だ。いなければいけないで幸い、ではある。万が一巻き込まれようものなら、無事では済まないだろうから。

これ程の被害だ。修繕費用は相当な額になるだろう。

しかし、住人への迷惑も修繕費の工面も知らぬとばかり、子供達は街中を通り過ぎると、ブルックリン橋を模倣した麻帆良大橋へと飛び去って行った。

今度は橋を落とすつもりか。

遠目で二人を観察していた三人組は、表面上は冷静な仮面を被ってはいたものの、内心穏やかではなかった。子供が空を飛ぶ非現実な光景に、街が破壊されていく様を、指を咥えて眺めるしかない事に、街の破壊活動から二時間近く経過しても警官一人現れない異常

さに、内情は様々に入り乱れている。

「……あれが……魔法使い……『英雄の息子』かい……」

怨嗟のこもった暗い声音で、二人いる女の片方が呟いた。双眼鏡を顔に当てているため顔の造形は不明だが、首の後ろでポニーテールに結わえた尻に届く長髪が特徴的な女だ。双眼鏡と眼鏡のレンズがぶつかり、カチカチと小さな音を立てている。

その双眼鏡が、女の手の中でミシリと嫌な音を立てる。

「落ち着いて下さい、天ヶ崎さん」

もう一人の女が、二歩後ろから声をかけた。こちらは髪が軽く肩にかかる程度のショートカットで、やや目尻の吊り上がった性格のきつそうな容貌だ。歳は二十代前半と言ったところか。

「……分かつとる、分かつとる。暴走はせえへんよ」

天ヶ崎と呼ばれた女は、食い縛った歯の間から辛うじて声を絞り出すと、強力な磁力に抗うかのように双眼鏡を引き？がした。本来なら美人に分類される面立ちが、親の仇を睨む怨念の宿る目つきで台無しになっている。視線は相変わらず、子供達のいる方角に固定されたままだ。

いや、事実、彼女、天ヶ崎千草（あまがさき・ちぐさ）にとり、魔法使いは両親の仇だ。魔法使い同士の戦争のあった二十年前、彼女の両親はその戦争に巻き込まれ、帰らぬ人となったのだ。街を容易に破壊する魔法を戯れで連発する魔法使い達に、隔意や敵意を抱くなど言うのが難しい。

ましてや、飛び交っている子供の一方は、その戦争で『英雄』と讃えられるようになった人物の息子だ。自分の両親がその戦争で殺

され、家族を奪われたのに、奪った側の魔法使いは家庭を築いている。八つ当たりや逆恨みの類と自覚していても、遣り処のない憎悪や憤怒に胸が焦がされる。

「……そう。なら良いです」

ショートカットの女、倉橋和泉（くらはし・いずみ）は千草が自制に努めているのを確認すると、鋭利な視線を子供達のいる方角へ戻した。と言っても、千草が双眼鏡を使って監視する程に距離があるので、肉眼で見えるのは元の暗さと相まって、チカチカと不規則に明滅する光だけだ。

「志門さん、そちらは？」

前方から目を逸らさず、千草の隣でビデオカメラを回す最後の一人に声をかける。

「ああ？ まあ、うまく撮れているんじゃないか？」

華奢な三脚に乗せたビデオカメラから目を離さず答えたのは、志門勇人（しもん・ゆうと）という名前だ。距離があるのと光量が少ないのとで、口で言う程に撮影が順調でないと、不機嫌な口調から察せられる。

それと、この場にはいないがもう一人を加えた四人が、特殊資料整理室の派遣した今回の『麻帆良大停電』の偵察隊だ。

ただし千草だけ、現在の所属は『警察庁長官官房総務課特別資料室係』、通称『心霊班』になっている。都内が管轄の警視庁所属では、埼玉県内にある麻帆良での活動に支障があるための、一時的な措置だ。また、麻帆良市警察署を弾劾する権限を得るためでもある。

偵察と言っても、着用しているのは普段のスーツではなく、警察

官の制服だ。警察官と分かれれば魔法使い達も攻撃を控えるだろうと、淡い期待を込めてのものだ。千草と和泉がスカートでなくスラックスを履いているのは、屋外活動と言う理由の他、四月中旬の真夜中の冷気に対応するためだ。

「しつかりしい？ あんさんの腕次第で、証拠が一件増えるんやからな」

幾分口調に硬さが残っているものの、いつの間にか落ち着きを取り戻し、双眼鏡を再び覗き込んでいる千草だ。

世が世なら両親の復讐に目が眩み、見境のないテロリストへの道を歩んでいたかもしれない。魔法使いの好き勝手し放題の現状を知り、警察官という選択肢の機会を得、道を踏み外さずに済んだのだ。

「へいへい」

カメラから目を離さずに、勇人は気だるげに手をひらひらと振った。傍目には真剣さが微塵も感じられないが、やるべき仕事はきっちりこなす男だ。本人曰く「肩肘張ったって良い仕事はできない」

確かに正論を含んでいる。しかし日頃の言動が社会人としてどうか、というレベルに劣化しているのだから問題だ。それが原因で、真面目が売りの部分のある和泉が、苦情を並べ立てるのが資料室の日課に近い。

だが、ここは麻帆良学園都市。世間一般の常識と、日本の司法権力が通用しない無法の街だ。そんな敵地においては、さしもの和泉も同僚の無作法をとやかく言ったりしない。

しばらくの間、三人の間に無言の時間が流れた。

その間にも千草の双眼鏡の向こうでは、麻帆良大橋が少年少女の

魔法により半壊していた。

それでもなお、麻帆良警察署に動きは見られない。パトカー一台、警官一人現れる素振りすらない。

「職務怠慢もいい加減にせいよ……」

千草の呟きは、同じ警察官としての憤慨か、魔法使い達に好き勝手される街への憐憫か。

もつとも、麻帆良市警に動きがないのは、怠慢だけが理由ではない。

<認識阻害魔法>の結界。

異常を異常と、安全と危険を判別する悟性が、『麻帆良学園都市』全体に張り巡らされた魔法により、狂わされているのだ。言うなれば、本人が自覚できない程度の軽い酩酊状態に置かれ、正常な判断能力を奪われている状態だ。

ただしこれは、本人に酔わされた覚えが無く、車の運転中に人を轢殺しかけても笑って済ませてしまうような、道徳心や罪悪感、遵法意識すら曖昧にしてしまう凶悪な代物だ。加えて、血液・尿・呼気検査等の既存の検査では異常が検出されないだけに、下手なアルコールや薬物よりも性質たぶが悪い。

千草達三人が<認識阻害魔法>の影響下にないのは、その存在を知り、あらかじめ対策を講じているからに他ならない。

そのうちにも、これが締めとばかりに少年少女は対峙し、雌雄を決すべく互いに魔法を放った。雷と氷の嵐がせめぎ合い、僅かな均衡の後、少女を吹き飛ばす。

どのような魔法の効果によるものか、少女の衣類はマントを残し

弾け飛び、夜目にも白い裸体が晒される。

「……撮影は続けます」

カメラから目を離さず、食い入るように身を乗り出す勇人に、背後の二人が刺すような視線を向けるが、止める発言はしない。

少女は橋の欄干を越えた空中で体勢を立て直すと、力を使い果たして両膝を着いた少年を見降ろし、二言三言言葉を投げかけていた。察するに少年への勝利宣言だろう。

少女は両手を振り上げ……。

次の行動は、突然戻った街灯の明かりに妨害された。

「何や。予定より早いか」

千草は双眼鏡から目を外すと、さざ波のように広がる照明に目を狭めた。

時間を確認すれば、二三時五五分。メンテナンス終了予定は二四時。予定より五分程早い。が、早い分には誤差の範囲内だろう。

「……いや。『英雄の息子』を勝たせるための小細工やろうな。

ほんま、虫酸の走る連中や……」

苦虫を噛み潰した顔で千草は吐き捨てた。

『英雄の息子』など、日本においては『十歳未満の外国人の少年』一人分の価値しかない。

それが何を考えてか、麻帆良学園都市では見ての通りの放置振りだ。『英雄の息子』に魔法使い達が寄せる期待の程など、魔法使いならぬ身では知りようもない。しかし破壊活動を黙認する態度から、法治国家である日本にとり、許容できるものでないのは確かだ。

治安維持の公僕として、現行犯逮捕すべきと喉元まで出かかる思考を、千草は何とか飲み下した。深呼吸を二回し、気持ちを落ち着けてから、二人に顔を向ける。

「さ。そろそろ撤収しよか」

千草が声をかけるまでもなく、勇人は撮影を終えたカメラをしまい、和泉は携帯無線機で県警に応援の要請を行っていた。県警を通じて麻帆良警察署を動かす腹で、これで麻帆良警察署が動けばよし、動かないならば、撮影した映像を怠慢と癒着の証拠にして、『関東魔法協会』諸共に潰すだけだ。

と、和泉の手元でガチリと金属の食い込む音が鳴った。

「伏せて！」

事態を真つ先に把握したのは、半壊した無線機を手にしていた和泉だった。狙われたのが自分か無線機かはともかく、狙撃されたのだと理解するのに時間はかからない。

後の反応は、訓練と経験の賜物だ。

和泉の声に、千草と勇人も瞬時に地に伏せ、次の狙撃に備えた。

銃声の聞こえない所から、よほど彼我の距離が大きいのか、消音器を使っているのだろうと推測する。

「………停電が終わると同時に狙撃するなんて、どんだけ頭がいかれとるんや。つつか、通信、傍受されとるんやないやろな!？」

いわゆる『麻帆良学園都市』外周には、侵入者対策におびただしい数の監視カメラが設置されている。それらのどれかに姿を捉えられたにしても、一千や二千では効かない数に上るカメラから、停電からの復帰直後に三人をピンポイントで発見するなど、数千分の一

の確率なものだ。

考えられるのは、和泉の警察無線を傍受、そこから現在地を割り出し、狙撃した可能性だ。

しかし三人が携帯する通信機は、今年から導入の始まった新型デジタル無線のAPRシリーズだ。これは一九九〇年から警察で使用していたデジタル無線形式『MPR』の老朽化に伴い入れ替えられたもので、早々には復号デコードできないはず。

それが早くも傍受されている可能性に、千草が愚痴を零すのも無理はない。

「威嚇のつもりかもしれませんがよ？」

勇人のずれた気休めに、千草と和泉は反論しなかった。警察官であれば、威嚇は頭上の空へ撃つものだ。万が一にも、何かに命中する事はある得ない話だ。

「連中の思考の分析は後にして下さい。まずはここから引き上げましょう」

冷静な和泉の指摘に、二人に否やは無かった。

顔に当てた無線機を狙い撃つことから、服装から警察官と判別しているはずだ。それでも発砲してくれば、これはもう確信犯で間違いない。

二射目が来ないのを幸い、身を低くした姿勢で車を置いた方向へ移動を始める。無線機を破壊された和泉に代わり、千草が応援を求めるとも忘れない。

だが、無難に乗ってきたパトカーに辿り着けたものの、三人が気

を抜ける状況にはなかった。

車上の赤いランプやヘッドライトすら灯していないパトカーの運転席のドアは開け放たれ、その下にはうつ伏せに倒れる警察官が一人。

「熊谷^{くまがい}はん!？」

千草が駆け寄ろうとしたところへ、三人の進行方向から小柄な人影が飛び出し、銀光が煌めいた。

第二話 麻帆良大停電（後書き）

参考資料

Wikipedia『風の聖痕』

<http://ptl/zjff>

Wikipedia『警察無線』

<http://ptl/dgr8>

Wikipedia『日本の警察官』

<http://ptl/ellv>

第三話 辻斬り

警察官ならば見逃してもらえらるだろうという期待が、灼熱地獄に放り込まれた雪玉の寿命並に儂いものだとか突き付けられるのは、決して幸運な事ではない。

こと、撤退を妨害する敵性戦力が、他人を傷つける経験に豊富で、小型拳銃と警棒しか武器を認められていない警察官三人を合わせたよりも実力が上で、その使用は最終手段と制限のある警察官と違い遠慮手加減をする意図がなく、なおかつ先制攻撃を仕掛けてきた場合、なおさらだ。

銀光の正体が、野太刀と呼ばれる大振りの日本刀が街灯を照り返したものだとか三人が気付く前に、千草の無線機は二つに断ち切られ、千草自身腹をしたたかに打ち据えられ、呻く事もままならず崩れ落ちていた。

「……え？」

そんな間の抜けた声を和泉が発した時には、野太刀の切っ先は勇人の喉元に突き付けられていた。

「動くな！」

一喝したのは小柄な少女だった。サイドテールにまとめた長い髪に、幼い顔立ちに似合わぬ鋭い目つき。小豆色のブレザーとチエック地のスカートからするに、麻帆良の学生だろう。容姿からして高校生には見えず、おそらくは中学生だろうか。

身の丈四分の三程もある野太刀を握る女子中学生が、自分よりも上背のある警察官二人を恫喝する。

端から見れば実にシュールな光景だ。

「こんな実力で侵入するなど、舐められたものだな！」

侮蔑すら含む口調の少女に、勇人と和泉は返すべき反応に迷った。深夜十二時過ぎに未成年者が徘徊している事、警察官に躊躇いなく暴行を加える事、警察官を前に刀剣を振り回している事、麻帆良をどこかの領土と見なす発言をしている事、指摘したい箇所がありすぎて言葉が出ない。

「それとも、警察官の恰好をすれば、見逃してもらえんでも思っただか？」

もう一点追加、ニセ警察官と誤解している事も、だ。

四人が乗ってきた車は、上半分が白、下半分が黒に色分けされたツートンカラーの『レガシー』だ。車体横と後部には『警視庁』と『POLICE』の文字が大きく書かれ、車体の屋根には赤色警光灯も付いている。

それを見てもニセ警官と断じる少女に、知能に問題ありと偏見を抱いてしまうのは間違いだろうか。

「……本物の警察官なのだな」

いつ次の狙撃が来るか、激昂した少女が勇人の首を刎ねないか、不安と心配が胸中を巡る中、和泉は慎重に言葉を選んだ。勇人は刃先を喉に突き付けられ、千草は身体を丸めて蹲つてと、どちらも少女に返答できる状態にない。

「それに侵入も何も、昼間に正面から堂々と入っている」

警察官の制服で行動する以上、こそこそと隠れ潜んで侵入する訳にはいかなかったのだ。公務と言う名分もある。

しかしそんな公権力の威光が麻帆良の魔法使いに通用しないのは、身を持って体験させられている所だ。

「ふざけるな！ ただの警察官が、こんな所をうろついているはずないだろが！！」

少女の怒声は、魔法の存在を知らなければ、意味を理解できなかっただろう。

「……どういう事かな？」

予測はできても、確認の言葉は口にしない。大方<認識阻害の魔法>か、警察も懐柔済みと言う事だろう。

感情のまま何か叫ぼうと口を開きかけた少女は、途中思い直したのか、頭を振って冷静になろうと努めているようだ。

「とにかく！ お前達には色々聞きたい事がある！ おとなしくしろ！」

少女の要求、と言うか威嚇は、本来であれば和泉達警察官の側が告げる内容だ。少なくとも深夜を徘徊する未成年者が、日本刀を振り回して警察官に迫る言葉ではない。

それがまかり通ってしまうあたり、麻帆良の常識は日本の非常識、と言うところか。

「おとなしくしろ？ ……それはこちらのセリフだ」

緊張で背中を滴る汗の嫌な感触に、内心気持ち悪さを覚えつつも平然を装う和泉に、少女は怪訝そうに眉根を寄せた。

「何を……」

その後の言葉は、不意を衝かれ吐き出した息に取って替わられた。

蹲った姿勢から、千草が少女の両脚にしがみついたのだ。

千草を切り捨てようとする少女の右腕を、野太刀が首筋を軽く切り裂くのも構わず、勇人が飛びかかって抑える。

和泉は左腕だ。

両脚の動きを封じられ、両腕を掴まれた少女は、大人二人分の体重に耐え切れず、路上に倒れた。

「ええいつ、放せっ！」

三人の拘束を振りほどこうと、喚き暴れる少女の左腕を引き延ばすと、和泉は手錠を取り出した。

「銃砲刀剣類所持等取締法違反と、公務執行妨害の現行犯で逮捕します」

手錠を開き、少女の左手に嵌める

相手がおとなしくしていれば、本来手錠をかける必要はない。しかも規則上、アメリカのように後ろ手に拘束できないし、テレビドラマのように手首の上からガチャリと簡単にかけられるものでなく、手首に食い込む程きつくもできない。野太刀を振り回す障害にはなく、辛いかもしれないが、両腕を振り回すのを防ぐ役には立つ。

そして何より、酷な表現をするなら、相手に逮捕されたのだと自覚させ、心を折る効果がある。

案の定、自らの左手に嵌められた銀色の金属環に、少女は一瞬であれ目を奪われ、動きを止めた。その隙に勇人が野太刀を引き？がし、我に戻った少女が暴れ出すにも構わず、右腕にも手錠を嵌めてしまっ。

ここに到り、ようやく少女は暴れるのを止めた。乱れた息遣いからするに、疲れただけかもしれない。

息が乱れているのは、警察官三人にしても同じだ。自分達が怪我をしないよう、なおかつ刃物を振り回す相手を傷つけずに取り押さえるのだ。心身的な負担は大きい。

「……天ヶ崎さん、大丈夫ですか？」

どこか呆然とした表情の少女を立たせようとし、未だ両脚にしがみついた千草に気付いた和泉は声をかけた。

「あんま……大丈夫やないな……」

千草の声に力が籠っていないのは、疲労だけが理由ではない。額に滲む脂汗が、少女に打たれた腹部の痛みが強さを語っている。

「その喋り方！ 貴様ら、やはり関西の回し者か！！」

先程の侮蔑から一転、憎悪を込めて睨みつけてくる少女に、冷めた視線を三人は向けた。正確には、刃物で切りかかってきた無法者を見る目、そのものだ。

勿論、彼女の怒声に誰も答えない。

麻帆良の魔法使いに関する知識があれば、彼女が敵意を示すのも頷ける。

魔法使いの組織『関東魔法協会』が、目下攻略対象と設定しているのが、京都に拠点を置く『関西呪術協会』である。関東魔法協会の会長、近衛近右衛門の生家であり、関東が魔法使いからなる組織であるのに対し、関西は対照的に呪術師を擁する組織だ。

ただし関東側の取る手段がまっとうでないのは、千草の京訛りに過剰に反応するところからも、魔法使いにとり都合の良い情操教育を行っている事が見て取れる。

だからと言って、魔法使いの犠牲者である少女に同情し、開放し

たりはしない。野太刀を振り回すなど、見逃すには大きすぎる犯罪行為だ。

「……立つんだ」

両手首に嵌った手錠を腰に紐で縛りつけた和泉は、少女の左腕を掴んで立たせた。

四人目の警察官、熊谷由貴（くまがい・ゆき）は幸い軽傷だった。野太刀の峰で額と首の後ろを殴られ、昏倒させられたのが経緯の全でだ。もつとも、殴られたのが頭なだけに、後日精密検査を受ける事になっている。

何らかの格闘技をしているようなごつい体格に、二メートル近い巨躯の由貴を、野太刀を持っていたとは言え、身長一五〇センチ程の女子中学生が叩きのめしたのだから、警察官三人相手に啖呵を切った時と同様、さぞかしシユールな光景だっただろう。

麻帆良全域に張られた「認識阻害」の結界により、正常な判断力を奪われた住人から見れば、笑い話の一つになる光景かもしれない。でも、それは結局のところ、少女の罪状が一件追加されるにすぎなかった。

魔法使い達の工作だろう、一向に現れない麻帆良市警の応援に歯軋りし、いつ再開されるか知れぬ狙撃と、少女を救出すべく駆けつけるだろう応援の魔法使い達に戦々恐々としながら、それでもどうにか無事に麻帆良市警察署に到着できた四人は、ほっと胸を撫で下ろしたものだ。た。

少女の身柄を麻帆良署の警察官に引き渡した後、四人は小さ目の会議室を借りると、そこへ足を運んだ。既に時間は深夜の一時をとうに回り、辻斬り少女の拘束にと、心身共に疲労していたが、魔法使い達の次の手が読めない以上、時間に余裕はないと見るべきだろう。

特殊資料整理室の面々の長い夜はまだ終わらない……。

第三話 辻斬り（後書き）

参考資料

教えて！ goo 『刑事・警察官が被疑者を逮捕する時、手錠のかけ方の違いですが、通常逮捕の』 2010年9月27日

<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/6211599.html>

Wikipedia 『公務の執行を妨害する罪』

<http://ptl/v2p7>

Wikipedia 『銃砲刀剣類所持等取締法』

<http://ptl/r4j7>

Wikipedia 『逮捕』

<http://ptl/JRjr>

Wikipedia 『手錠』

<http://ptl/FPtv>

Wikipedia 『パトロールカー』

<http://ptl/61Qw>

Yahoo 知恵袋 『日本警察の手錠の掛け方で質問です。』 2010年5月15日

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1040832730

第四話 麻帆良流少年刑事事件判例

ノックをし、入室を促す声が戻ると、ドアを開ける。

ドアと向かいの反対側、企業の重役が使うような重厚な机に座るのは、頭の半ば以上禿げ上がった五十代と思しい男だった。仕立ての良いスーツの襟に輝く、白地の八咫鏡（やたのかがみ）の中央に『裁』の金文字を配したバッジから、この人物が判事だと知れる。

場所は麻帆良家庭裁判所、一判事の事務室である。

「失礼します。警察庁長官官房と警視庁のお二方に来ていただき
ました」

麻帆良署警察官の一人の前置きに続き、入室した千草と由貴も、
それぞれの自己紹介と名刺を交換した。

「用件は聞いている。現行犯逮捕された中学生の送致の相談だそ
うだな。資料を」

衝立ついたての陰に隠された応接用の三人掛けソファに千草と由貴を座ら
せ、麻帆良署の警察官二名には予備のパイプ椅子を、自身は一人掛
けのソファに腰を下ろした判事は、世間話もそこに用件を切り
出した。

この時点で判事が用件を把握しているのにも驚きだ。だがそれよ
りも、麻帆良署の者が取り調べの終えていない調書を平然と提出し
た事に、千草は叫び出す衝動を押さえ切れなかった。

「ちよつと待つて下さい！」

公の場所では千草とて標準語を話すようにしている。

声を上げた千草に、麻帆良住人の三人は怪訝そうな目を向けた。

千草と由貴、所轄外の二人がわざわざ家庭裁判所に足を運ぶ羽目になった理由は単純だ。

「昨夜の辻斬りの少女の件で、現場に居合わせた警察官の意見を聞きたい」

本来であれば、四人の陳述など必要ないはずだ。現行犯逮捕した少女の身柄を引き渡した際に、逮捕に至った経緯を報告書として提出している。

未成年者に深夜徘徊を許す生活環境、他人へ日本刀を振り回す危険を自覚できない非常識、警察官の真偽を区別できない不見識、関西方面の方言に対する明瞭な敵意と殺意を示す良識不足等、生活環境や教育環境に大きな問題があるように伺えるため、少年鑑別所に社会性の再学習が必要、と所見も一文添付している。これは調査開始前の意見なので、裁判所の決定に大きく影響を与えるものではない。

「なぜ私達の説明が必要なのでしょうか？ まだ調書すら取っていないのに。おかしいじゃないですか」

未成年者による刑事事件、つまり少年刑事事件は、懲役や禁錮を含む犯罪を除き、全て家庭裁判所に送致される決まりだ。成人の犯罪であれば、微罪処分や起訴猶予の形で検察に届けない場合もあるのに比べ、厳しい内容になっている。

ここまででは問題ない。

しかし送致の際には、調書や証拠物件、その他の参考資料があれば、それらも合わせて送付しなくてはならない、とある。最初の取り調べも行わず、家庭裁判所に書類を提出する少年課に、疑問を呈するのも当然だろう。

「それと……」

千草は言葉を切り、三人とは別の方角へ目を向けた。そしてもう一つ、重大な問題もあった。

「この人は誰ですか？ 警察や裁判所の関係者には見えないのですが」

部屋の片側を占める本棚の前に、もう一人男がいるのだ。

年の頃は三十代半ばから四十代前半と言ったところか。季節を無視した灰白色のスーツに、手入れを怠った感のある乱れた髪、数日は剃ってなさそうな無精ヒゲと、どう見ても法律の対極にいる人物だ。少なくとも堅気カタクキの商売ではないだろう。

見咎められるとは思ってもいなかったのか、男は僅かに目線を上げ、千草をねめつけた。

「……ああ。彼は……」

「麻帆良学園本校女子中等部で英語を教えています。タカミチ・T・高畑と言います」

判事の紹介を遮って自己紹介した男は、魔法使い関係者の中でも要注意リストにある危険人物だった。例えリストがなくても、多種多様な犯罪者を見てきた千草や由貴であれば、下手なチンピラやくざよりも暴力で生きてきた匂いを、経験則から嗅ぎ取るのは難事ではない。

そして何よりもその名は、千草の両親が殺されたあの戦争で、英雄となった一人だ。

一瞬、千草の目の前が真っ暗になり、視界が戻ると共に殺意が膨れ上がっていた。拳銃に手が伸びかけるのを、理性の冷静な部分でどうにか押し留める。

「教師……？ 生活指導の方ですか？ それとも担任？」

素知らぬふりを通すのは、千草には非常な苦痛を伴う行為だった。

「前年度一月までの元担任です」

はははと場所と状況を弁えずに笑うタカミチに、千草は腸を煮えくり返しながらも、表面上は一切の関心を失ったように取り繕った。

既にタカミチの評価を、服装・身だしなみ・礼儀の面で、社会的に最低ランク近くに位置づけている。このような人物に教鞭を取らせる麻帆良学園に嫌悪を、教えられる生徒達に同情が湧く。

「ここに元担任のいる理由、説明してもらえますか？」

千草が問うた先は、タカミチではなく判事だった。

生活指導だろうと担任だろうと、この時点では教師に出る幕はない。

拘置されると一度だけ、被疑者は取り調べの警察官を通じ、電話連絡を取ってもらう事ができる。その時の連絡先が仮に教師だとしても、教師に何かができる訳ではない。警察から保護者へ積極的に連絡が行く事はなく、連絡を受けた教師が下手に保護者に確認すれば、生徒のプライバシー侵害に繋がる。知人に弁護士がいるなら、相談するのがせいぜいだろう。

それがどういいう経緯か、教師が、生徒指導でも担任でもない『元』

担任が、送致以前の段階で判事と共にいる。理由を尋ねるに十分な疑惑だ。

「それは……」

「まあ今回は、元担任としてより、後見人の代理で来ていますから」

判事が口を開きかけたところを、タカミチが答えを被せて封じた。

「元教師だろうと後見人代理だろうと、ここにいる理由の説明にはならないのでは？」

同席する資格を問えば、資格を持つのは弁護士、つまり被疑者の少女の担当弁護士ぐらいだ。それとて正式な手続きを踏むのであれば、拘留中の警察署に赴くのが筋であり、やはりこの場にいる理由の説明にはならない。

質問を重ねる千草をしばし観察する目を向けてから、判事は手にした書類に目を落とした。

「いえね。警察の方に連絡はして、誤解だったと了解は得ているんですけど、うちの生徒が一人、間違えて逮捕されてしまったようです」

勝手に答えるタカミチの説明は、元教師も後見人代理も関係のないものだ。

「このままでは、生徒の経歴と警察の威信に傷が付いてしまいます。そこで、お互い見なかった、聞かなかったことにしましょう。とまあ、そのための相談です」

事ここに至り、この場が設置された目的を千草は悟った。

侮蔑を込めた視線を、判事と二人の地元警察官に向ける。

書類に目を通していため俯き加減の判事の表情は伺えないが、

警察官二人に悪びれた様子は見えない。

予想として、タカミチが余計な口を挟まなければ、この事件をなかつた事にすべく、あれこれ口八丁を用いて説得するつもりだったのだろう。

「つまり、警察官に発砲したり、未成年者が深夜に徘徊したり、日本刀を警察官に向けたりしたのは、あくまで誤解。そういう形で事件を揉み消したい……という事ですか……？」

冷たく睨み付ける千草に、判事は顔を上げようとせず、警察官二名はおもねるような笑みを見せた。

事実、麻帆良警察署が応援の要請に応答しなかった件で、呆れ果てた釈明を千草達は聞かされている。

「現場サイドで誤解による衝突があつたが解決した。警察の出勤は不要。そう学園長から連絡があり、警察官を派遣しなかった」

当直の警察官の一人が、悪意のない苦笑で後頭部を掻きながら告げたのは、そんな内容だった。反省の欠片もなく平然と告げた上、学園長との通話記録は保管する理由がないと判断し削除した、と来ている。

「揉み消すとは人間きの悪い……。事実その通りなのですから、曲解されるのは心外ですね」

タカミチの気だるげな笑みは、麻帆良の外から来た自分達を嘲っているように千草には感じられた。自称教師の無法者を一睨みし、三人の法律関係者にさらに冷たい一瞥を向ける。

「それが麻帆良警察署と、麻帆良家庭裁判所の意見。そう判断してよろしいですか？」

三人の返答を待たず、千草は取り出したシステム手帳にペンを走らせた。

千草の所属する『警察庁長官官房』は、警察庁の内部部局の一つだ。警察内警察とも言つべき部署で、警察内の不祥事の調査など内部犯罪を取り締まる監察が、その業務である。

「一体何を……？」

剣呑な雰囲気も千草から感じたらしい警察官の一人が尋ねた。

「私の持ち物に私が何を書きつけようと、そちらには関係のない話でしょう？」

メモを書き終えた千草がパタンと手帳を閉じ、これまでにない冷酷な目で交互に見遣ると、警察官二人は心持ち顔色を変えた。

「総務課でも、長官官房ですから」

総務課は、首席監察官の監督下にある部署の一つで、その内容は、法令案の審査・政策評価・情報公開・広報・国会との連絡・公私の団体や機関との折衝と言った総合調整である。

そして多岐に渡る総務課の業務のうち、各都道府県・区市町村の警察署がマニュアル通りの捜査・調書の作成・管理・保管の相談と指導の窓口か、特別資料室系の役割だ。監察する権限を有さないものの、他部署に報告するのに問題はない。

「やましい行為がなければ、心配するほどのものではありません」

ちなみに『心霊班』なる不名誉な称号は、業務内容柄、各地の警察署で報告書にまとめるのに頭を悩ませる事件、例えば悪霊・怨霊・

妖魔ら魑魅魍魎や魔法絡みの事件に関し、捏造や隠蔽をせずに無難かつ常識的な範囲での書類を作成する技術の指導や、事件解決のための助言等を行う事から付けられたあだ名だ。

「麻帆良には麻帆良のやり方があるんです！ 長官官房だからって、しゃしゃり出さないで下さい！！」

もう一人の警察官がパイプ椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった。詰め寄ろうと一歩踏み出しかけるが、こちらもソファから腰を上げた由貴の巨軀に気圧され、渋々と椅子に座り直す。

「痛くない腹を探られるのは、どこの警察署だって不愉快になるもんです」

ぼそぼそとした警察官の抗議の声は、それでも千草の耳に届くには十分な音量だった。

「別に難しい話ではないのですが？」

由貴がソファに座り直すのを見届け、千草は軽蔑を隠そうともせずに警察官を睨みつけた。<認識障害魔法の結界>の弊害なのか、それとも魔法使いが直々に思考操作をしているのか、警察官としての問題行為を深く自覚せずに実行できる辺り、麻帆良の警察官に職務意識が欠落していると知れる。

「警察官職務執行法と犯罪捜査規範に従っていると自信があるなら、何も心配する事はないでしょう？」

国民の安全・自由・生命・財産を守る警察官は、同時に、それらを侵害する権利を持つ。それ故に行動や捜査手順には制約が掛かっている。

「……もつとも、深夜に日本刀を振り回す女子学生の現行犯逮捕

が、どうすれば誤認逮捕となるのか、具体的に説明できるなら、ですが」

都道府県別に青少年健全育成条例と言うものがあり、埼玉県も例外ではない。『埼玉県青少年健全育成条例』も他県と同じに、保護者は午後十一時から午前四時までの未成年者の外出を控えさせるべき、と訴えている。また、刃渡り六センチ以上の刃物の持ち運びは、業務が正当な理由のない限り『銃砲刀剣類所持等取締法』で禁じられている。もしかしたら危険な目に遭うかも、という理由が『正当な理由』と認められていないのは、言うまでもない。

そこへ、ふうとあからさまに溜息を漏らしたのはタカミチだった。

「やれやれ。これは聞き捨てなりませんね。これじゃあまるで、生徒のために思って四方八方手を尽くす教師全員、悪人の扱いじゃないですか」

千草は胡散臭い教師を横目でちらりと見てから、書類に目を落としましたま微動だにしない判事に視線を戻した。

「私達がここに呼ばれた理由は、昨夜の中学生を逮捕した状況説明が必要だからと聞いています。口頭説明を求められれば応じます。でも本来は必要のない事でしょう？ 不世話な言い方になります。彼女の公判を始めようと不処分にしようと、所轄外の私達には関係のない話です」

そして、警察官達を軽く一瞥してから、話を続ける。

「今し方言ったように、日本刀を持って深夜徘徊する中学生の現行犯逮捕が、どうすれば誤認逮捕となるのか、その根拠も併せて説

明をお願いします」

千草の質問に、判事は僅かに視線を上げただけで、またしても書類に芽を落としてしまう。警察官は我関せずとばかりに、少女の元担任へと目を逸らせた。

代わりに、タカミチがこほんと咳払いした。

「何を言い出すかと思えば……。さっき説明したでしょう。彼女の行動は、学園長公認だったんです。その事は警察署にも説明し、納得してもらっています。ただ、普通に釈放しては書類が残り、彼女の経歴に傷が付いてしまうでしょう。そこで今回の件については、警察にも誤認逮捕の汚名が残らないよう水に流して、お互い綺麗さっぱり忘れましょうって相談ですよ。実際に誤認逮捕したあなた方にとっても、その方が都合良いでしょう？」

「同意できまへん」

即答の千草だった。思わず京都弁が出てしまったのは致し方ない。これまで無視してきたのに、咄嗟に反応してしまった己の迂闊さの後悔を胸の奥に押し込め、嫌々とタカミチに顔を向ける。

物覚えの悪い子供を教え諭すような物言いも、顔に貼り付けた作り物の笑みも、謝罪の言葉一つない余裕も、自分達が超法規的存在と信じる物腰も、社会人の身だしなみすら整えていないタカミチの一挙一動の全てが癪に障る。

「それって要は、今回の件を隠蔽しろと言っているんで間違いないですか？ 受け入れられまへんな、法律的にも、道徳的にも」
タカミチは心持ち肩を竦め、苦笑混じりに頭を左右に振った。

「だから言っているでしょう。学園長公認だと。問題ありません」

麻帆良の異常を前もって知らなければ、いつまで経っても話は平
行線のままだろう。

「麻帆良内の処理は任せて下さい。後は、あなた達がここでの出
来事を忘れてくれれば、全てが丸く収まるんです。誰も逮捕されて
いないし、誰の経歴にも傷が残らない。事件も誤解もなかった。皆
にとつて、善い事尽くめじゃないですか。迷う理由は何一つないで
しょう?」

本心か作り物か知れない笑顔を変わず浮かべるタカミチに、千
草は魔法使いのおぞましさを改めて実感した。認識阻害で正常な思
考を住人のように奪われていたら、法や道義を忘れて耳に心地良い
この提案を、無条件に受け入れていたかもしれない。

千草ほどに魔法使いの醸す毒に慣れていない由貴は、精神的に吐
き気を催しかけたのか、顔色を悪くして右手を口に添えていた。

「一万歩譲って、そちらの要望に私らが従ったとしても、法的な
問題が……」

「麻帆良は治外法権です。気にする必要はありません」
今度はタカミチが即答する番だった。

麻帆良が治外法権の指定を受けているなど、日本のどこを見ても
そのような事実は存在しない。治外法権が認められているのは、大
使館や総領事館の公使館に限られているし、外交特権を有するのは、
その国を代表して派遣された人物と、せいぜい寝食を共にする家族
に対してだ。万単位の日本人が住む街に、警察署や裁判所など公共
機関を含めて治外法権を与えるような狂気の沙汰を、外務省が行う
はずもない。

「……麻帆良が治外法権……？ 初耳ですな。で、外務省のどこで確認できるか、教えてもらえますか？」

外務省でなければ、学校法人を扱う文部科学省だろうか。学園敷地内でなら、ある程度の自由は法律でも認めている。それとて日本の法律の範囲内に限られ、ましてや、市街地や公共機関にまで学園の自治が及ぶはずもない。

「それは関係ないでしょう？ そちらの警察官も言ったじゃないですか。麻帆良には麻帆良のやり方がある。あなた方がそのやり方に従えば、全てはこれまで通り誰もが無傷で済むんです。そのどこに不満があるんですか」

理解できないと、笑顔を貼り付けたまま頭を振るタカミチだ。

「関係ない……？ あるやろが！ 麻帆良が治外法権だ言うなら……」

声を張り上げた千草を、判事がテーブルに叩き付けた書類のパンという音が遮った。

「これ以上の議論は不要だ」

長らく身じろぎも一声発することもなかった判事が、タカミチ、千草、由貴を順繰りに見回した。麻帆良市警の警察官二名には、面白げもなさそうに一瞥をくれる。

「確認する。警察官への発砲、未成年者の深夜徘徊、刃物の持ち歩き、警察官への攻撃。これらは学園長公認の行為だった」

誤解がありました、というタカミチの補足を、判事は睨みつけて黙らせた。

「つまり学園長は意図して、親から預かっている生徒に、青少年

健全育成条例を顧みずに深夜に街中を歩かせ、銃砲刀剣類所持等取締法を無視して日本刀を所持させ、それを持って警察官の公務を妨害させた。そうなるな？」

「ですから全ては誤解です。警察署も理解しています」
すかさず再び誤解を主張するタカミチだが、八工を追い払うような仕草で右手を振る判事に黙らされる。

「報告書の状況を鑑みれば、被疑者には保護観察処分が妥当と判断できる。が、未成年者の監督能力を、学園長の監督下にある麻帆良学園が持ち合わせていると考えるのは難しい。よって、保護観察中の彼女の通学先は、麻帆良以外が妥当だろう」

三度誤解を主張するかと思われたタカミチは、何か思うところがあるのか、今度は何も言わない。

「しかしながら……」

判事のこの言葉を予測できたのだろう、タカミチの笑みは深まり、千草には悪魔の呟きにも等しく聞こえた。

「……少年法では、家庭裁判所に事件を持ち込む前に、調書や証拠を一括で提出するよう定められている。それが、だ。調書を取る前の段階で、被疑者の後見人代理が裁判所に誤解だと押しかけている有様だ。誰だ、被疑者の逮捕を後見人に連絡したのは？」

判事にねめつけられた警察官二人は、申し合わせたように背筋を伸ばした。

「少年課の誰かだと思われます。誤解で警察に逮捕されたと、誰かが気を利かせたのではないかと」

余りと言えば余りの回答に、千草は頭を抱えたい気持ちだった。自制できたのは社会人の良識だ。

同じ感想は判事も抱いたらしい。

「つまり麻帆良市警察署の少年課は、少年刑事事件の取り扱いの基礎の基礎すら知らない無能共の溜り場、という認識で良いな。犯罪捜査規範の初手で違反されては、裁判所で公判不能と出すこともできないだろうが！」

最後の部分では声を荒げると、判事は手にしていた書類を警察官に乱暴に付き返した。

逮捕された少女は審判にかけられる事なく、拘置も認められずに釈放される、と言うことだ。事件そのものが警察の不手際で事件性を失ったため、調書を裁判所に届ける必要すらない。

「以上だ。他に話すことは？」

判事の視線の先は、タカミチで固定されていた。

「いえ、ありません。先生の果敢な判断に感謝します」

初めから一度もなりを潜めたことのない笑みを浮かべたまま、タカミチは謝辞を述べると、慇懃に一礼した。

「………できの悪い劇ですか、これは………」

仏頂面ながらもタカミチの右手を取る判事と、へりくだった虚ろな笑いを湛える警察官達を眺め遣り、由貴は半ば呆然と呻いた。

愚痴は外に出てからにせいと、肘で由貴の脇腹を軽く突つく千草も、その感想には同意だった。

大した怪我ではなくても由貴は頭を殴打され、和泉は学園長の手配した何者かに狙撃され、自分は当の少女に切りつけられているのだ。その事件を麻帆良署の不手際で存在しなかったとする判事の不機嫌が、どうしても演技にしか見えず、隠蔽するためにこじつけたように思える。

せめてもの救いは、千草や由貴がそれぞれの上司に提出する業務報告書に、虚偽を書くよう指示されなかった事だろう。弾痕や切断跡のある通信機を、事故で破損しましたなどと報告できるはずもない。

「吐き気がするで、ほんま……」

千草は内心で憤慨した。麻帆良の住人を良いように操る魔法使いの存在には、嘔吐感に似た嫌悪しか抱けない。

事はもう、仇討ちだけでは済まなかった。両親を死地に追い遣ったように、魔法使い達は麻帆良とその住人を、今現在も食い物にし続けているのだ。自由や平等や対等と言う公式は成り立たない。一方的な略取だ。

麻帆良が廃墟か瓦礫の山か更地になるかは分からない。麻帆良の末がどうなろうと、連中には大々的な制裁を下してやる。

決意を新たにする千草だった。

第四話 麻帆良流少年刑事事件判例（後書き）

参考資料

警察庁採用情報サイト『長官官房』

<http://www.npa.go.jp/saiyou/npa/about/shoukai/choukan.html>

警視庁『刃物の話』

<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/seian/hamono/hamono.htm>

検察庁『少年事件の流れ』

<http://www.kensatsu.go.jp/gyoumu/shonen/jiken.htm>
埼玉県青少年健全育成条例、2011年3月30日

<http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/416609.pdf>

総務省法令データ提供システム『警察官職務執行法』

<http://law.e-gov.go.jp/html/data/S23/S23HO136.html>

Wikipedia『外交特権』

<http://ptl/2|fe>

Wikipedia『監察官』

<http://ptl/CNGR>

Wikipedia『警察庁』

<http://ptl/2Z3J>

Wikipedia『警察庁長官官房』

<http://ptl/T7VD>

W i k i p e d i a 『 裁判官 』
h t t p : / / p . t t l / w i o m
W i k i p e d i a 『 少年保護手続 』
h t t p : / / p . t t l / X 7 8 3
W i k i p e d i a 『 治外法権 』
h t t p : / / p . t t l / Y 8 0 0

第五話 独裁者

麻帆良学園は、本校女子中等部のみで一学年×組まで二十四クラスのマノモス校である。一学年だけでも七百三十七人を擁する規模で、それが三学年プラス高等部に、近隣にはミッシヨン系の女子高校もあり、この区画に通う女子学生の数は五千人以上になる計算だ。

あまがさきちゆうぐさ 天ヶ崎千草と熊谷由貴が家庭裁判所で下手な茶番劇に付き合わされている頃。

しもんゆうじん 志門勇人と倉橋和泉の二人は、麻帆良市警察署から車で二十分程離れた『女子校エリア』の、本校女子中等部の校舎内の一室にあった。

一クラス丸ごと収まりそうな広い部屋だ。調度品もそれなりに配置されているのに、空虚感が半端ない。安っぽいノリウム張りの床は、学校らしく見た目のままでも、教室のような貧相な灰色の引き戸とは異なる濃茶の重厚なドア。空虚感を拭い切れない部屋の調度品は、オフィスで見かけるスチール製の安物ではなく、素人目にも高価と知れる立派な木作りだ。

「ここが麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門（このえ・このえもん）が執務を執る『学園長室』である。」

「よく来てくれたの。まあ中に入るが良い」

学園長の椅子はさぞかし座り心地が良いのだろう。何の比喻もなく文字通り椅子から腰を浮かせる素振りすら見せず、大仰に入室を促す部屋の主への勇人の第一印象は、「胡散臭い無礼な老人」であ

り、和泉の場合は「常識知らずのエセ仙人」だった。

評価の是非はともかく、最初の言葉で二人がそのような第一印象を抱いてしまったのは当然だろう。

礼儀知らずの挨拶に加え、部屋の主の容姿や服装も不快感を煽るのだから。

七十を越える老人の頭は、後頭部が後ろに大きく伸びた異形だった。その先端は、馬の尻尾のように一房だけ残った白髪を鬚に結っている。どこかの水墨画に描かれている仙人か、妖怪ぬらりひょんを思わせる容貌だ。目が半ば隠れる太く長い眉毛や、口元をほぼ完全に覆う胸にまで届くあご髭、何か古武術の道着と作務衣を足して二で割ったような珍妙な衣装が、その印象に拍車をかけている。

無論、学園長の椅子に座るのは、そのような人外存在ではない。

『頭蓋縫合早期癒合症（とうがいほうこうそうきゆうこうしょう）』
と言う頭骨が歪む症状がある。乳幼児の頭骨の成長期に、頭蓋骨を構成するパーツが通常の成長より早くくっ付いてしまい、十分に大きく育たなかったり、反対に異様に大きくなってしまうたりと、見た目悪く育ってしまう状態の名称だ。その症状の一つで、これは『舟状頭』と呼ばれる形状である。

頭蓋縫合早期癒合症は乳児の頃であれば、現代の整形外科で治療可能だ。それだけに、二十代前半の和泉や勇人には初見の頭蓋の形状である。失礼と理解しても違和感と不快感を禁じ得ない。

「警視庁特殊資料整理室の志門勇人巡查です」

「同じく、警視庁特殊資料整理室の倉橋和泉巡查です」

相手の容貌と服装への不快感を表に出さないよう心掛け、型通り

の自己紹介と名刺を取り出す二人に、当の本人は大儀とばかりに鷹揚に頷いた。

「うむ。儂が麻帆良学園学園長の近衛近右衛門じゃ」

フオフオフオとアナクロニズムな相手の神経を逆撫でする笑い声を立て、名刺を交換する近右衛門の所作は、二人の評価を更に下方修正するものだった。

椅子から立ち上がりもせず、机を挟んだ反対側から左手で名刺を受け取り、右手で自分の名刺を差し出すなど、社会人としての礼儀を欠くにも甚だしい。そして二人の名刺を一瞥した後は、そのまま引き出しにしまってしまおう呆れようだ。

確かに、多くの公立の小中学校では六十歳、大学の教授でも遅くて七十歳が定年だ。それを踏まえれば、七十をとうに過ぎている近右衛門が多少の礼儀を欠いても、寛大に見ても良いのかもしれない。しかし学園長の肩書きで接するのなら、服装から身だしなみ、礼儀まで社会人であるべきだろう。それがこの有様なのだから、一から学習して出直してこい。そう叫びたくなるのも無理からぬ振る舞いだ。

「ま、立ち話もなんじゃから、座るがよかるう」

学習項目に言葉遣いを加えつつ、二人は部屋の中央寄りにでんと置かれた応接セットの三人掛けのソファに腰を下ろした。近右衛門の一分に満たない無礼の数々を振り返るに、ソファを勧めた事だけがまともな社会人の行動だ。

勧めた事、だけ、であるが。

近右衛門は学園長の椅子から今なお立ち上がろうとせず、神経に

触る笑い声を上げていた。

「さて。今回はお主らに出向いてもらって、ご苦労じゃったの」

もらった名刺を名刺入れと重ねてテーブルに置く間もなく、近右衛門は自分の机の上で指を絡めると、用件を切り出した。意図して無礼を押し通しているのではないかと、勘繰ってしまう程に礼儀のなっていない態度と言葉遣いだ。

「……昨夜の件で、と伺っていますが、どの件でしょう？」

近右衛門への嫌悪感が一杯で口の開かない和泉に代わり、勇人が生唾を飲み込んでから、ようよう質問を吐き出した。

勿論、理由も無しに近右衛門を訪問したのではない。

「昨晚は当学園の生徒が迷惑をかけた。については謝罪したいので、本校女子中等部の学園長室に来てほしい」

千草と由貴が出かける時間を見計らったようなタイミングで、取り次いだ少年課から伝言が届いたのだ。しかもご丁寧にも三十分後に時間指定をして、だ。

面会の必要性を爪の先程も感じなかった二人が、当初は多忙を理由に断りの電話を入れたのは言うまでもない。謝罪する相手呼びつけ、こちらの予定を考慮せずに時間指定するような礼儀知らずにいちいち合わせてやる必要などない。その前に、アポを取るつもりなら、伝言でなく和泉か勇人に直接繋いでもらうべきだとは、指摘するまでもない。

伝言と短い電話でのやり取りだけで、社会礼儀を備えていない人物と近右衛門を判断するには十分だった。それでも不本意な面談に

一時間遅れに変更して応じたのは、取りなした少年課の顔を立てたのが主な理由である。

「実は、お主らが昨夜逮捕した当校の女子生徒の件じゃ」

電話での用件を繰り返し、近右衛門は椅子の背もたれに深々と背中を預けた。

「実は、あの子は僕の使いで出かけていた最中でのう。夜半に外出させたのが原因で逮捕されてしまうとは、実に不運な話じゃ。そう思わんかの？」

同情を買うつもりなのか、しおらしい態度で溜め息を一つ漏らすと、近右衛門は二人を交互に見遣った。

「無論、麻帆良署の方には、彼女は僕の使いじゃと伝えておるし、逮捕が誤解によるとも理解しとる。しかしのう……」

ここで言葉を切り、反応を伺うような近右衛門の視線から、後の言葉は察しろと言う態度が透けて見える。

二人の胸中に込み上げるのは、不愉快を通り越した不快感だった。謝罪したいという話が、警察の誤認逮捕になっているのも不快感の原因だが、言外の意味を周囲が汲み取り動くものと疑われない物腰も大きい。無礼に無礼を重ねる厚顔無恥さと混じり合い、投げやりに会話を投げ捨て、立ち去りたい気持ちが大きくなる。

「しかし……何か？」

表情に出やすい和泉が顔を顰めると、テーブルの下で勇人は爪先で制し、近右衛門が途切れさせた言い分の続きを促した。相手が不快感の塊のような老人でも、いや、そんな老人だからこそ、言葉を濁らせたまま会話を打ち切る訳にはいかない。

勇人の態度に、近右衛門は一瞬片眉を上げるも、説明を続けた。

「実は……僕の娘婿が彼女の後見人でのう……住んでいるのが京都なんじゃ。そんな遠方に住んどんから、彼女が逮捕されたなどと心配させるのもあれじゃし……。後は分かるじゃろ？」

同情を誘おうとしているのか、言外の要望を読み取れと催促しているのか、覗き込むようにちらちらと向けられる近右衛門の視線は、正直、不快感しか醸し出さない。

「分かりませんね、何を期待されているのか知りませんが」
大方、その娘婿とやらに連絡するなと言っただろう。まかり間違えても、生徒のために自ら泥を被るような真似はするまいと、この数分間でも近右衛門の人物像をそのように判断するには十分だ。

「なに、そう難しい話ではなくての……」
近右衛門は組んでいた指を解くと、胸元に届く髭をしごいた。心持ち狭められた目は、物分かりの悪い勇人を軽く睨んでいるようでもある。

「この麻帆良で見聞きした事、全て忘れてくれれば良いのじゃよ。そうさのう……取り敢えず、お主らの見た映画の撮影現場から、彼女を麻帆良署に連行した辺りの全て、かの。映像から書類まで、全ての記録も含めてのう」

麻帆良大橋が半壊する魔法使い同士の抗争は、映画の撮影で誤魔化すつもりらしい。また、その現場を勇人が撮影していたのも、近右衛門の話からするにどうやら把握されているようだ。

「……そんな要求が通ると、まさか本気で考えている訳ではない

でしょう?」

裁判所の一判事の部屋で、千草と由貴が同様の要求を突き付けられていると知れば、勇人達の評価は更に下降しただろう。

さすがに声音に不快の色を滲ませた勇人に、近右衛門は小気味良さそうに例の不快な笑いで答えた。

「フオフオフオ。心配には及ばんよ。麻帆良の警察署の方には、話を通してあるからの。事件性はないという事で、既に解決してる」

顔に当てていた通信機を狙撃された和泉が、憤慨して腰を浮かしかけ、勇人はその腕を掴んで座り直させた。十センチ横にずれていたら悲惨な事になっていたのに、それを笑い飛ばし、しかも無かったことで済ませようとする近右衛門に、不快だけが募っていく。

「……それは逮捕した女子中学生だけでなく、我々に発砲した何者かについても。そういう事ですか?」

横目で和泉の様子を観察しながら尋ねる勇人に、近右衛門は首肯した。

「うむ。その者については、こちらで処罰を与える事にしておる。じゃからは心配せず、儂に任せてもらえれば悪いようにはせん」

近右衛門の口から出たのは、よりもよって警察官に面と向かって銃撃の共犯を認め、その証拠隠滅を図るとの自供だ。

和泉が手錠に手をかけ、今度こそ腰を上げた。勇人も止めない。

「……警察署へ同行、お願いできますか?」

言葉こそ疑問形だが、口調は半ば以上現行犯逮捕だと言わんばか

りの、感情を伺わせない平坦さだ。

そんな和泉の行動を、さも面白い冗談を聞いたかのように、近右衛門は笑って返した。

「ふうむ。協力したいのは山々じゃが、これは断るしかないのう。事件でもないのに、警察に出向く理由もないしの」

そしてもう一度、近右衛門は愉快げに、不快な笑いをひとしきり上げた。

犯罪行為を自慢する無法者の老人に手を出せない憤りに、全身を小刻みに震わせる和泉の背中を眺めながら、勇人は現段階で打てる手立てを考えていた。

現行犯逮捕……は、近右衛門が犯罪を目の前で行った訳ではないので使えない。

緊急逮捕であれば、証拠隠滅を防ぐ理由で使える……かもしれない。ただし仄めかされているだけなので、逮捕理由には到れない。

しかも、和泉と千草の破壊された通信機に由貴の怪我と、証拠も十分あるのに、麻帆良警察署は事件として取り上げないと……とは近右衛門の言か。とは言え、昨晚応援を要請しても警察官一人派遣されなかった経緯は、勇人として耳にしている。出まかせと言う線は薄いだろう。真偽はいずれにせよ、管轄地違いでは任意同行を願っているのは越権行為になるか。

「まあ、同行を拒否されるのなら仕方ありません。その辺は地元警察署に任せましょう」

和泉が怒気を湛えた目で振り返り、近右衛門の眉毛に半ば以上隠された目が、面白い玩具を見つけたかのように狭められた。

「ですが、見聞きした事や忘れてたり、証拠を隠滅したり、そんな違反行為には同意できませんね」

告げるべきを告げて早々に撤退、が勇人の結論だった。近右衛門に本来の理由の謝罪をする意図が微塵もないと判明している今、長居するだけ不快さが増すだけだ。

「フオ？ なぜじゃ？ 事件なんぞなかった。それが全てじゃろう。余計な物を残しては、色々面倒になるのではないかの？」

魔法使いに不都合な出来事は麻帆良内で全て揉み消す。そんな傲慢な意図が明け透けて覗け、それが実行されることに一抹の疑惑すら抱かない近右衛門が、不快感の塊にしか見えないのは、勇人の目の錯覚だろうか。

そんな不快感とは反対に、近右衛門に従っても良いのでは、という気持ちも勇人の中で芽生えていた。事件が麻帆良の外に出る事はないし、迂闊に証拠を手元に残しておいては、報告義務を怠ったとして後々面倒に繋がるだろう。

それならばいっそ、証拠を消してしまうのが賢い選択と言うものだ。映像証拠がなくなったと知れば、後で干草にこっそり絞られるだろうが、映像データなど頻繁にミスで消えてしまうものだ。疑われはすまい。

「……………そうですね……………」

近右衛門と不快な問答を繰り返すのも癪だし、と同意の声を発しかけたところへ、横合いから延びた手が胸板を叩いた。

何事かと隣を見、厳しい顔をした和泉と視線が重なる。

この一瞬で、勇人ははっと我に返った。いつの間にか頭の中にかかっていた霧が晴れ、明瞭な思考が戻ってくる。

同時に、自分の身に何が起きていたのかも一瞬で悟る。いつの間にか、近右衛門に魔法で操られかけていたらしい。

「……でも、こちらもちからの事情があるのですよ。そちらには関係のない、ね」

頭蓋骨の内側をミミズが這うような不快感を押し隠し、勇人は拒絶の言葉で返した。

勿体ぶった言い方をしても、実は大した理由ではない。特殊資料整理室に戻れば、一時間毎の行動報告書の提出と、専門家による力ウンセリングが内規で義務付けられているからだ。魔法による記憶と思考の改ざん対策の一環である。

そんな勇人の態度に、近右衛門は他人を不快にさせる愉快げな笑いを続けながら、見遣る視線に力を込めた。

「ほほう。どんな事情なののか？」

「……それは……公務に関わることですから、教えられません」

再び近右衛門の求めるままに答えを口にしかけ、勇人は慌てて答えを変えた。脳を細長い触手のようなもので直接弄くり回される異様な感覚に、これこそが魔法使いの思考操作なのだと理解する。霧香や和泉から受けた訓練があるからこそ気づけたような、普通であれば気づけない違和感だ。

「……ふむ。それは残念じゃのう」

あご髭をしごく近右衛門からは、魔法を使った様子や、魔法を破られた驚きは伺えない。

だが、これ以上の会話が無意味どころか危険だと判断するには、丁度良い機会だった。今回は和泉が横にいたから抵抗できたようなもので、時間をかけられては、麻帆良の住人のように操り人形にされるのは目に見えている。証拠隠滅の協力要請には断りを入れたのだから、時期としても頃合いだろう。

その前に、幾つか確認したい関心が勇人にはあった。

「話は変わりますが……」

和泉に目線で座るよう促し、勇人はごく普通の質問を近右衛門にぶつけた。

「近衛学園長の『学園長』の肩書き、この本校女子中等部の最高責任者でよろしいのですか？」

面談の場所に女子中等部内の学園長室を指定されたのだから、近右衛門の責任の範囲が女子中等部にあると判断するのは当然のことだ。

そんな勇人に、近右衛門はわずかに不機嫌さを滲ませた。

「フオ。それは違うぞい。その名刺にもあるじゃろう。『麻帆良学園学園長』、つまりこの麻帆良学園全体の最高責任者が、儂じゃ」

「……ああ、なる程。兼任されていると」

隣のソファでは座り直した和泉が、おかしな質問を、と言いたげな視線を向けてくるが、勇人は気にも留めなかった。

「男子中等部、高等部、初等部、大学部と、全ての学部の責任者を兼任されている、と。大変ですね」

いかにもしみじみとした勇人の口振りに、近右衛門の僅かな不機嫌は払拭されたようだった。

「フオフオフオ。分かってくれるか。何せ規模が規模じゃからのう。生徒の数も一万を越えるもんじゃからな、老骨には毎日が戦争じゃよ」

だったら引退しろよ、と言いたい気持ちを勇人は押し隠し、次の質問を投げた。

「では、どこの学部の教頭先生も、皆優秀と言う事でしょうね。この女子中等部の教頭先生を紹介していただけますか？ ご挨拶したいので」

この一言で、他人を不快にさせて悦に浸っていた近右衛門の笑い声が途絶えた。

「……何が言いたい？」

ねめつける視線が刺し貫く視線に変わり、頭蓋骨を這いずるミミズが活発になった感覚に、やや顔色を悪くしつつも、勇人は表情を変えずに通した。

「麻帆良学園には……いませんよね。教頭という役職の教師」

これは麻帆良入りする前に、勇人が軽く調査して知り得た情報だ。学校という組織には、校長の補佐と不在時の職務代行として、教頭を置くよう『学校教育法』に明記されている。それは私立学校において、『私立学校法』にて同様であると記載されている事だ。

校長と言つ役職も同じで、兼任は禁じていないものの、各学校に一人置くのが規則付けられている。同じ麻帆良学園の名を冠した中等部であれ、男子校と女子校が分かれているのならば、それぞれに校長を置き、教頭を置き、教諭陣を置かなくてはならない。その上で、初等部から大学部までを総括する責任者を置くなら、それらの学部に関与しない別の人物を立てるのが筋だ。

「それに、学校評議員も受け入れていない」

学校運営に関し、校長と共に検討・協議を行うのが学校評議員、そのための会議が学校評議会だ。関係者から成る私立学校の理事会と異なり、評議員は学校の外から校長の推薦で指名される有識者五名で編成される。埼玉県内の公立校は評議会の受け入れを指導要綱として配布しており、私立の麻帆良学園には適用されないと見え、地域社会へ開かれた学校作りが学校評議会の名目にある以上、本来であれば受け入れるべきものではあるう。

「フオッフオ。それがどうかしたかの？ この麻帆良学園で僕は五十年やってきておる。儂以上に、この学園の生徒と運営に詳しい人物はいなかるうて。今さら外の協力なぞいらんぞ？」

「……まあ、そういう事にしておきましょう」

頭蓋縫合早期癒合症のあご髭を生やした無数のシミズが、脳みそを食い散らかすイメージに吐き気を催しながら、それでも表情には出さず、勇人はこれで会話は終わりとの合図に、ぽんと膝を叩いた。

学校教育法にせよ学校評議員にせよ、残念ながら警察の立ち入れる事象ではない。さりとて、近右衛門の本質を読み取るには、十分な対談だったと言えるよう。

「さて。我々をここに呼びつけた理由を果たすつもりが学園長には無いようなので、ここで失礼しましょう」

立ち上がった勇人に、むと近右衛門は小さく唸るものの、謝罪の言葉が出る事はなかった。

短い挨拶で学園長室を和泉と辞した勇人の胸中は、近衛近右衛門という人物の評価だった。

権力にしがみつくと無能で有害な汚物。麻帆良は自浄作用の効かなくなつた汚物溜まり。

一言で言い表すならこれに尽きるだろう。七十を越えても学園長の椅子を降りようとせず、部下を育てず、後進を育てず、外の意見を取り入れず、思考を覗き見して改ざんし、対立候補や将来の自分の立場を脅かしかねない地位は廃止する。他にどう表現しろと言うのか。

その独善な独裁を可能としているのが、魔法の力と、唯々諾々と手足として動く『関東魔法協会』の面々だ。

勇人は平均的な日本人家庭の生まれと育ちだ。千草のように両親を魔法使いに殺されたのでも、霧香や和泉のような陰陽師の家系に生まれたのでもない。多少は上司や周りのバイアスがかかっているも、その思考の根底は極一般的な日本人警察官のものだ。

その判断基準でも、近右衛門の存在は色々な意味で異常だった。そしてそのような人害を頭に置く魔法使いとその組織の違法行為の数々が、日本の治安を守る上で障害であると、結論付けたのは自然

な帰結だろう。

排除が必要なのは、この僅かな会合でも嫌という程に実感できた。魔法で思考を捻じ曲げられかけた実体験も大きく影響している。

「あれをどうにかしよう、ってのも納得だよなあ」

自分と和泉しかいない無人の廊下を歩きながら、自分の耳にも届かない感慨を勇人は漏らした。

第五話 独裁者（後書き）

参考資料

学校法人自治医科大学形成外科学部門 『頭蓋縫合早期癒合症』

<http://www.jichhi.ac.jp/keisei/disease1.html>

『科技大で教員の8割が定年延長を至急検討するよう学長に要請』

<http://www5.ocn.ne.jp/union-mu/kagidaitenin.htm>

慶応義塾大学病院医療・健康情報サイト 『頭蓋縫合早期癒合症』 2010年3月1日

<http://kompas.hosp.keio.ac.jp/contents/000176.html>

『埼玉県立学校学校評議員設置要綱』

<http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/443970.pdf>

知ってて便利なお役立ち情報 『名刺の渡し方』大切なビジネスマナー』

<http://www.from-kobe.com/6/知って得する!!冠婚葬祭マナー> 『ビジネスマナー? 服装・身だしなみ?』

<http://www.hmsyu.net/b|hukusou.html>

総務省法令データ提供システム 『私立学校法』

<http://law.e-gov.go.jp/html.data/S24/S24HO270.html>

デジセン商事.com 『名刺交換のマナーって?』

<http://www.digital-sense.co>.

<http://www.sub/03/9.html>

ビジネスマナーと基礎知識『男性の身だしなみ（オフィスで）』

<http://www.jp-guide.net/businessmanner/business/fashionman.html>

福岡大学医学部整形外科『頭の変形（頭蓋狭頭症、クルーゾン病、アペール症候群、眼窩隔離症）』

<http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/plastic/asyptomatamaib.hp>

法庫『学校教育法』

<http://www.houko.com/00/01/S22/026.HTM#s4>

Wikipedia『学校評議員』

<http://ptl/1v-o>

Yahoo 知恵袋『公立小中学校の教員の定年退職年齢は2013年はまだ満60歳と聞きましたが本当』2011年6月8日

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1064015805

第六話 包囲網

『警視庁特殊資料整理室』の三名と『警察庁長官官房総務課特別資料整理室係』一名が、麻帆良学園学園長の近衛このえこのえもん近右衛門と本校女子中等部教師のタカミチ・T・高畑と不本意な会合を持った日から明けて翌週。

特殊資料整理室室長のたちはなきりか橘霧香の姿は、京都府警察本部の大会議室にあった。

出席者は霧香と本部長の他、京都府警各課からの四十名近い警察官達だ。大規模警察本部の一つである京都府警察署の本部長、すなわち警察組織で三十八名しかいない警視監の一人が顔を出すところからも、今回の京都府警の意気込みが伺えようというものだ。

「警視庁の特殊資料整理室の橘霧香警視です。この度は私共資料室への協力、ありがとうございます」

階級にしては少々へりくだった挨拶で一礼してから、霧香は会議室に詰める一同を見回した。二十代半ばの若い警視に反感を向ける目がないのを確認し、ひとまず小さく満足の息をつく。

「本題に入る前に……資料は回っているでしょうか？」

何かの講習会のように、折り畳み式の椅子を霧香の立つ壇に向けて並べ、四十人近い警察官が座る光景はなかなか圧巻だ。最前列の警察官達の手には、あらかじめ配布した資料が握られているのが見える。

「『麻帆良学園』による強制就労児童の保護」

A四版サイズの十枚程の資料には、そんなタイトルが振られている

た。

タイトルだけを見れば、警察官が四十人も出席する会議に値するとは思えないだろう。

しかし出席者の所属を見れば、その印象は一変する。少年課からだけでなく、刑事部からは捜査第一課の特殊犯捜査係と機動捜査隊、そして警備部からは警備第一課・二課・三課に機動隊までと、児童保護ではなく大規模な組織犯罪かテロ集団に挑むかのような争々たる面々だ。

近衛近右衛門を始め、麻帆良に潜む魔法使いと、その組織『関東魔法協会』に引導を渡す第一手として成功させたい作戦だ。霧香の立案した『計画』には、仮に失敗しても挽回する手立ては用意しているものの、初手でつまずきたくはない。

否、ここまで顔触れを揃えて、失敗は許されない。

普段は妖艶さ漂う口元を引き締め、内心で気合いを入れると、霧香は会議室の前半分の照明を落とし、ノートパソコンにつないだプロジェクターを作動させた。

「では……。埼玉県麻帆良市にある麻帆良学園本校中等部、その内の五クラスが、今週四月二十二日から二十六日まで、四泊五日の修学旅行で京都に入ります」

『麻帆良学園』の名前で、一部の警察官が身じろぎした。少年課だろうか。

構わずに霧香はマウスを操作し、白壁に画像を映し出した。和風の黒い瓦屋根と白い壁、そしてベランダとつながる大きい窓

が目立つ建物の写真だ。

「宿泊場所は右京区の『嵐山ホテル』。麻帆良学園はこのホテルを毎年利用しており、今年も例外ではありません」

ここで霧香は一息入れ、警察官達の反応を伺った。口を挟む様子がないと見て取ってから本題に触れる。

「さて、ここからが本題です。この麻帆良学園……結論から言います。学生の一部を徴募し、兵士として訓練している疑惑があります。今回の目的は、訓練を受けている児童を保護するのは勿論、彼らの口から証言を得る事です」

日本国内の出来事としては荒唐無稽にしか思えない疑惑に、霧香は東の間、夢の中にいるのかと現実感を喪失しかけた。本部長始め京都府警上層部の合意を受けていなければ、自身妄想を口走っていると錯覚しそうな気分だ。

「保護対象は三年A組、以降三・Aとする関係者二名です」

次に壁に映し出されたのは、ボサボサの赤い髪が特徴的な、眼鏡をかけた少年の写真だった。パスポートからの転写らしく、名前を除き住所その他の個人情報黒く塗り潰されている。

「まず一人目。ネギ・スプリングフィールド。一九九四年、ウェールズ出身の満九歳。担当は英語。三・Aの担任です」

この情報は資料にも記載されているため、ざわめきが起きたりはない。それでも不快感を示す咳払いがいくつか聞こえる。

「ウエールズの義務教育は満十六歳まで。飛び級の制度はありませんから、当然、義務教育すら終わっていません。それでも英語教師をしているのは、オックスフォード大学卒業程度の語学力を備えていると、麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門が認めているからです。……大学卒業と、大学卒業と同程度の学力は、全く別物なのですが」

彼にとり学位の取得など無意味なのでしょう、という言葉が霧香は苦々しい思いと共に飲み込んだ。

年単位の勉学と高額な授業料、一講義一講義大学の提示するカリキュラムを積み重ね、一人や二人ではきかない教授陣を納得させる成績を確保し、卒業する事ようやく得られる学位と、一介の学園長の一声が同じ重さと価値を持つ。実にふざけた妄言を吐く老人ではないか。

「学士など取得していませんから、普通免許状の専修・一種・二種いずれにも受験資格がありません。特別免許状と臨時免許状では、中学校教諭になれません」

『教育職員免許法』を出席者全員が把握している訳がないので、霧香は補足を加えた。

特別免許状で教えられるのは、小学校か高等学校で担当する一科目に限られ、中学校の教育職員は対象外だ。臨時免許状も中学教諭は対象外の上、小学校なり高等学校なりの職場でも助教諭までに制限されている。

どちらの免許状にしる、普通教員免許状の取得と同様、『教育職員検定』に合格しなくてはならず、その受験資格には最低でも高校卒業の学歴と、免許状の授与には十八歳以上と言う高いハードルが存在する。何一つネギ少年には備わっていない。

「指摘するまでもありませんが、教員資格を持たないニセ教師の授業は、義務教育でも未履修扱いされかねません。どうやら学園長権限で、近衛はそれすら誤魔化すか隠蔽する心算だと推測されます」

無論の事、学園長にそのような権限はない。それどころか、そのような事態が起きないよう管理するのが義務だ。

霧香の脳裏に浮かんだのは、『ディプロマ・ミル』の単語だった。人生経験を単位に換算し、授業への出席やテストすら無しに、学位を有料で発行する商売の事だ。『学位工場』『学位商法』あるいは『デイグリー・ミル』とも呼ばれ、大体はキャンパスすら存在しないニセ大学の名前を用い、学士から博士号まで望む学部望む学位を販売している。当然ながら、そのように購入できる学位は無価値だし、アメリカの一部の州ではニセ学位の提示は違法にもされている。

ただ残念な話として、教授になりたくてもその条件に博士号がある大学や学部、ないし自分の肩書きに箔を付けたい人物が購入してしまうため、日本でも少なからぬ問題となっているのが実情だ。

近右衛門がネギ少年に貼り付けた箔は、近右衛門自らが主催者となったニセの教員資格であり、心ある教育者であれば唾棄すべき行為のはずだ。

「その上で、非常勤講師ですらなく、担任として未成年者に就労を強いている訳ですから、悪辣としか言えません」

未成年者の就労は『労働基準法』で制限されている。厚生労働大臣の許可を得れば就労は可能なものの、就けない職業は存在するし、学業を優先しなくてはならないのは言うまでもない。必要な免状が

『教育職員免許法』で十八歳未満には授与できないと規定されている以上、教職も就けない職業の一つだ。

「よって、今回は『児童福祉法』に基づいて身柄を確保。麻帆良学園からの干渉を断ちます」

『労働基準法』はあくまで労使関係の法律のため、暴行を受けた等の犯罪の通報のない限り、警察に手出しはできない。そして義務教育すら受けさせてもらえずにいる九歳児では、学園長の肩書きを持つ人物から違法な待遇を受けているとは、夢想だにしないだろうし、気付いても助けを求める知恵は浮かばないだろう。

ネギ少年に貼り付けられたニセ教師のレッテルについても同様だ。こちらは管轄が文部科学省と埼玉県教育委員会にあり、やはり警察がどうこう口出しできる問題ではない。

その点、『児童福祉法』を用いれば、刑事事件として介入が可能だ。教育を受けさせず労働させるなど児童虐待の要件として成立するし、ネギ少年が担任するクラスの生徒も虐待被害者とできるかもしれない。

「では、次の保護対象です」

次に映写されたのは、歳は十代半ばだろうか。黒髪ながら褐色の肌から、即座に日本人と判断できない少女だ。

「龍宮真名（たつみや・まな）。旧姓名、マナ・アルカナ。推定一九八八年生まれ、出生地不明。推定四歳の頃に戦災孤児だったところを、テロリスト……いえ、武装組織……失礼、非政府組織『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』に徴募され、『子ども兵士』として訓練を受ける。後、各地を転戦。二〇〇〇年

頃に部隊が壊滅。これを機に来日、養子縁組を経て帰化。龍宮姓を名乗る。現在は三・Aの生徒です」

次に続ける言葉が非常に忌々しく、霧香は一度言葉を途切れさせた。軽く深呼吸してから、吐き気を催す言葉を紡ぎ出す。

「そして今なお、麻帆良学園において、近衛近右衛門の指示の元、狙撃手としての活動を強いられているようです」

『子ども兵士』の単語までは資料にも書いてあるので、多少不愉快を示す雰囲気立ち上るものの、大きな声は上がらずにいた。それよりも「日本国内で」「狙撃手として」「労働を強いられている」「未成年者」の響きに、剣呑な囁きがあちこちで交わされる。

「まあ、信じ難いのは私も同意です」
そう言いつつ、霧香は映像を切り替えた。

在席する警察官達が見間違えるはずもないAPRシリーズ、警察用デジタル無線機の写真だ。今年から採用されたばかりの無線機は、通話マイクの部分が見る目のある警察官であれば銃弾によるものと見当を付けられる状態で半壊している。

言わずもがなな和泉の無線機だ。いかな麻帆良の魔法使いでも、外部の警察官を改めて襲撃し、記憶を操作する行為には走らなかつたのだ。あるいは、シリアルナンバーの付いた官給品を別物にすり替えるには、代替品を用意する時間がなかっただけなのかもしれない。

理由はともかく、無事に麻帆良を脱出できたのは行幸だ。

「ちょうど一週間前の四月十五日、部下を麻帆良に派遣したとこ

る、何者かに狙撃されました」

和泉ら三人の口頭と文書による報告と、千草から回ってきた報告書のコピーに肝を冷やし、麻帆良学園と麻帆良市警察の態度に怒り心頭したのはつい先日だ。口調こそ穏やかなものの、ぶり返した怒りを表に出さないようにするには苦勞を要した。

「幸い負傷者はなく、持ち帰った無線機に食い込んでいた銃弾から、彼女のものらしい指紋の一部が検出されました」

そして映像を替え、件の少女が日本に入国時に登録した指紋と、検出された指紋との比較写真を映し出す。

「逮捕状は申請しなかったのですか？」
名も知らない一人が尋ねたのは当然だろう。

「麻帆良市警は、事件はなかったと回答しています」
前半分の暗い席の表情は何えないが、後ろ半分の半数は啞然と呆然の混じり合った奇妙な顔をしていた。

「近衛学園長の使い中の行動で、これは誤解からの射撃、事件性はない、だそうです。既に事件そのものが麻帆良市警のデータベースに残っていません。そのため彼女の保護の名目は、任意同行になります」

「……絶対、買収か何かされてるだろ……」

誰かの呻きに、霧香は首肯で答えた。

「ですから、彼ら二名の身柄確保は、麻帆良から離れたここ、京都で行なう必要があります。麻帆良市警そのものが近衛の支配下に

ある怖れのあるため、彼らを麻帆良市近郊で保護しても、すぐに取り戻されてしまう可能性が高いからです」

虐待児童の保護施設の場所を、加害者側に教える児童指導員はいない。いかに魔法使い達でも、麻帆良から遠く離れた京都で保護した二人の居場所を、一両日で特定するのは無理だろう。

その間に『関東魔法協会』の名前を絞り出す予定だ。

霧香の説明に、不可思議な表情を見せていた警官達も納得したようだった。

「ただし銃火器を携行している危険があります。無論その場合には、保護ではなく現行犯逮捕して下さい。また彼女だけでなく、他にも『子ども兵士』の訓練を受けているらしき武装生徒が確認されています。接触する際には、十分な警戒が必要となるでしょう」

またも映像が切り替わり、今度は二つに断ち切られた無線機の写真に変わった。

懸念されるのが、千草達に現行犯逮捕された少女だ。修学旅行に同伴しているのか、同伴していても武装しているのか、実際の保護の段階にならなくては分からない。何せ資料の一切合財が処分されてしまったので、名前や学年すら不明なのだ。

霧香としては、他にも戦闘訓練を受けた生徒のいる可能性を示唆し、警戒してもらおう以外に手が無い。

そこへ婦人警官が拳手した。

「ちなみに橘警視は、最悪のケースとして、どの程度の被害を想定されているのでしょうか？」

尋ねたくなる心境は理解できた。

国宝や重要文化財が多く、国内外の重要人物や一般観光客の訪問も多い京都が、テロの標的にされるのは自明の理だ。そんな土地へ、学園という閉鎖された環境で『子ども兵士』に育成された生徒が、修学旅行を装い訪問する。受け入れたくないのが本音だろう。

霧香は一度目を閉じると、想定している最悪の事態を思い返し、目を開けた。

「一般生徒と宿の従業員を人質に立てこもり、大人の教師達を逃がすための囮として、踏み込んだ警官隊と共に自爆。確率としては非常に低いかもしれませんが、これが想定している最悪のケースです」

話している最中に、フィクション小説の設定かと、またも霧香は錯覚に陥りそうだった。

しかしその錯覚は、管轄が東京の霧香だからこそのものだ。実際平成になってからの十五年でも、京都は二桁に上るテロの被害を受けているし、国際的な対テロ活動の高まりからも、過激派やテロリストの行動には敏感だ。

「了解です」

未成年者二人の身柄の保護にしては過剰すぎると、批判を覚悟していた霧香が肩透かしを食った気分になる程あっさりと、女性警官は納得し引き下がった。

「なお、二人の保護手続きには、京都府知事の許可が必要です。手続きはどうなっているでしょうか？」

現在の京都府知事は、五年前まで内閣法制局で参事官を務め、改革派として知事選に名を挙げた就任二年目の、四十代後半の若手だ。複数の政党の支持を受けての当選のため、魔法使い関係で身動きが

取れるのか微妙な人物だ。

「問題ありません」

霧香の問いに、少年課であろう女性警官が起立して回答した。

「知事の許可は得ていますし、児童保護施設の手配も完了しています」

「了解です」

二月三月にも打ち合わせを行っていただけあり、手続きの方に問題はなさそうだ。

手配の手際に満足した霧香は、プロジェクターの電源を落とした。

「以上が、今回の児童保護に関する概要です。実行日は修学旅行の最終日、四月二十六日、午前八時を予定しています。が、麻帆良学園サイドの動きによっては、日時が変動する場合もあり得ます。準備だけは怠らないようお願いします」

最後に一礼すると、霧香は着席した。

次いで本部長が立ち上がり、京都府警察本部の指揮系統などの細かな打ち合わせが始まる。その会議自体には、警視庁の者がこれ以上の口出しをする訳にはいかず、霧香が口を挟める隙はない。

とは言え、最低でも問題の二人が予定通り保護されるだろう事を、霧香に疑う余地はなかった。

第六話 包囲網（後書き）

参考資料

赤松健作品総合研究所『魔法先生ネギま！研究所』

<http://www2u.biglobe.ne.jp/crown/negima/index.htm>

京都府警察『京都府警察のしくみ』

<http://www.pref.kyoto.jp/fukuisite/keimuk/sikumii/index.html>

京都府警察『京都を壊す過激派のテロ、ゲリラ』

<http://www.pref.kyoto.jp/fukuisite/anzen/bisan/j/kagekiha/index.html>

国際的な大学の質保証に関する調査研究協力者会議『「ディプロマ（ディグリー）・ミル」問題について』2003年11月28日

<http://p.tl/qINO>

総務省法令データ提供システム『教育職員免許法』

<http://law.e-gov.go.jp/html/data/S24/S24HO147.html>

文部科学省『教員免許制度の概要 - 教員を目指す皆さんへ - 』

<http://www.mext.go.jp/amenushotou/kyoin/main13|a2.htm>

Wikipedia『教育職員免許状』

<http://p.tl/lnPO>

Wikipedia『京都府警察』

<http://p.tl/EIrg>

Wikipedia『警視監』

<http://p.tl/BR3F>

Wikipedia 『警備部』

<http://ptl/wzcw>

Wikipedia 『少年兵』

<http://ptl/QASS>

Wikipedia 『龍宮真名』

<http://ptl/6wow>

Wikipedia 『ディプロマミル』

<http://ptl/afow>

Wikipedia 『山田啓二』

<http://ptl/swat>

Yahoo 知恵袋 『無免許の教員って罰則規定ないですよね?』

2008年1月6日

<http://detail.chiebukuro.ya>

http://qa/question_detail/q

1314151703

第七話 関西呪術協会

『京都府神社庁』

日本全国八万余の神社が結集し、設立した宗教学法人『神社本庁』の京都支部である。たかが支部と言っても、古都・京都の一千五百超の神社を包括宗教学法人として従え、京都支部の更に支部として、府内十九区に二十一箇所の出発点を持つ組織だ。

しかし京都府西京区の松尾駅から二百メートル程離れた松尾大社までの道すがら、その途中に堂々と建つ一風変わった様相の建物が、それ程のものとは思えまい。白い壁に青い斜の屋根の二階建ての建物で、一風、旅館とも公民館とも、神社・仏閣関係の記念館にも見える。

都内の各省庁舎と較べれば規模は格段に落ちるものの、曲がりなりににも庁舎と名の付く建物の小会議室の一室で、倉橋和泉は分不相応な自身の身分に、居心地の悪さを感じていた。

先日の近衛近右衛門のような、常識や良識や順法の意識が欠落した人の皮を被った『ナニカ』が相手ではない。既に二度面会し、まともな認識力を持つ人物だと判明している。何がしかの決着を迫られる面会でもない。

それでも少々腰が引けてしまうのは、相手の立場故だろう。

「さて……」

そう切り出し、気圧されがちな和泉の意識を浮上させたのは、当の悩みの人物だった。伸ばした黒髪に褐色の肌の、二十代後半とも四十代前半とも取れる年齢不詳な美丈夫だ。礼服を思わせる漆黒のスーツに、緑茶の入った湯呑を口にする様はなかなか絵になってい

る。

「日本との文化交流の一環として、神道について学びたい」

そのような名目でトルコ共和国から訪れたのが、イスタンブール大学で客員講師の肩書きを持つデユナミスと自己紹介した目の前の男だ。

「……今週中に面白いイベントが起きると聞いたのだが、それは例の協会と関係があるのかな？」

直截に尋ねてくる男に、和泉は回答に窮した。ちらと視線を横に向け、同席する神社庁の参事に目で助けを求めるも、当人も関心があるのか助け船は出してもらえない。

「……関係あると言えばありますし、無関係と言えば無関係かと……」

結局、どちらともつかない言葉で場を濁してしまう。

男の言う「例の協会」とは、『宗教法人関西呪術協会』の事だ。京都にある神道関係の宗教法人の一つで、京都を含む近畿地方と、大阪府など関西地方の神社と関係を持つ広範な組織である。とは言っても、関係ある全神社を含めても『京都府神社庁』傘下の神社の総数に遠く及ばない規模だ。

「そういう煮え切らない態度を取らなくても良いと思うがね？」

男は緑茶を一口含むと、湯呑を受け皿に置いた。

「いえ。公務に關しますから」

警察官として知り得た情報は、退職した後でも守秘する義務がある。

そう指摘すると、男はふむと唸って納得したようだった。公務に

関係する出来事があるとの答えが、求めていた回答だったのかもしれない。

「となると、こちらからの内部告発をそれなりに有効利用してもらえた。そう見ても良いか」

「……ノーコメントです」

タヌキとキツネの化かし合いのようなやり取りに、和泉はこの場にいるのが自分一人なのを心底悔いていた。この手の会話は上司の霧香が専門で、自分はこの場面では無口で通す気楽な立場のはずだ。麻帆良学園の学園長のように、一言毎に不快感を醸し出される会話でないのが幸いか。

「そもそも今週何かあるという話、どこから出てきたのですか」

「忘れてもらっては困る。『英雄の息子』が親書を協会に届けると言う話は、こちらからの情報だ」

即答するデュナミスに、紹介だけで面談には一度も出席していない白髪の少年を、和泉は思い出した。男と同様、トルコから短期留学しているフェイトと言う名の学生だ。さすがに大人の会話に子供を入れる訳にもいかないので、十分な面識が持っていないのは仕方がない。

その少年がどういう経緯か、研修生として『関西呪術協会』に加入しているそうだ。協会の内部事情が筒抜けなのは、特に諜報活動をしている訳ではなく、子供の研修生の前でも普通に会話され、緘口令すら敷かれていないかららしい。

「そう言えば、そうでしたね……」

この時点で、男と少年が魔法使いだと容易に察せる。

神道の勉強なら神社庁が本道だし、専門の教育機関として神社本庁が指定する学校法人の『國學院（こくがくいん）』も日本に八校ある。勉強のための選択肢としてはこちらが順当だ。本道から外れた感が強く名前負けしている『関西呪術協会』に、好き好んで勉強のために加入しようとするのは、近衛近右衛門からの情報を真に受け、西日本の最大勢力と誤認した魔法使い程度のものだ。

「そういう事だ」

デュナミスは頷くと、置いたばかりの湯呑を手に取った。口には付けず、少し手の中で弄ぶ。

「そのイベントに参加できないのは残念だ。せめて『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』共が慌てふためく様を、特等席から眺めるぐらいしたいものだ」

イベントが京都府警察署による麻帆良学園の生徒の保護なのか、その後に控えている『計画』を指しているのか、和泉に判断は付けられなかった。

いずれにしても、返す言葉は決まっている。

「これは我々警察の仕事ですから、部外者の立ち入りはお断りします。以前にもそうお伝えしたはずですが？」

口調に棘があるのは仕方あるまい。自分達警察官が、ともすれば生死に関わるかもしれない捕り物を『イベント』扱いされて、気分を害さずにいるのは難しい。

「ああ。気を悪くしたら済まない。そのつもりはなかった」

和泉の不快感を読み取ったのだらう、デュナミスは謝罪の言葉を口にする、視線を緑茶に向けた。

「しかし……実際にこちらに来なければ知りようもなかった事も確かにある。この緑茶にしてもそうだし、神社本庁も然り、コーテンコーキョージョー、と言ったか？ それもあるし、な」

「皇典講究所（こうてんこうきゅうじょ）ですな」

和泉が訂正に口を開きかけたところで、神社庁の参事が口を挟んだ。恰幅の良い中年の男で、神道の組織だから袴姿で同席している……という事はなく、仕立ての良さそうな濃灰色のスーツ姿だ。

「明治十五……失礼、グレゴリオ暦一八八二年に、神道の研究と後進の育成のために、皇典講究所は設立されました。そして一九四五年に他の神道関係の機関と合併し、今の神社庁の基礎ともなった訳ですが……」

神社庁の基となったのは、『皇典講究所』の他、『大日本神祇会（だいにほんじんぎかい）』『神宮奉斎会（じんぐうほうさいかい）』の三会だ。

ここぞとばかりに歴史を開陳し始めた参事に、和泉は心持ち眉をひそめ、話を振ったデュナミスに恨みがましい目を向けた。

「当時の明治政府の迷走ぶりの凄まじさは、富国強兵の名目の元、西洋文化の行きすぎた受け入れで、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）運動が盛んになってしまった史実まであります」

その混乱期にあつて、飛鳥時代の七世紀に設置され、陰ひなたに日本を支えてきた『陰陽寮』は、明治三年の一八七〇年に廃止されている。西洋文化の取り込みに反対する勢力の筆頭と見なされた事、臣下でありながら皇族の儀式に口出しをする等、天皇親政の弊害で

あつた事など、理由は幾つかある。

反面、天皇を頂点とする新政府の示しとして、神道は重用される事になるも、順風満帆とは言い難い迷走ぶりを発揮している。

『陰陽寮』廃止の翌年には、神祇の祭祀と行政を執り行う『神祇省（じんぎしょう）』が設立され、僅か半年後に『教部省』に改称。六年後に廃止の有様だ。この『教部省』では、布教と退魔の実働部隊として『教導職』を抱えていたものの、元々が無給無官の官吏だった事もあり、『教部省』が廃止されてから五年後に撤廃され、政府の手元に残っていた僅かな陰陽師を、引き留める手立てもないまま在野に下らせる結果となっている。

設立・改称・異動・解体・廃止・再び設立と繰り返した結果、今後の身の振り方に危機感を抱いた宗教人や陰陽師が、政府とは無関係の組織を設立し、自己の保全を目指したのは、自然な成り行きである。結果として、自称「正当な流れを汲む」組織が乱立したのもまた当然と言えよう。

「その中でも顕著だったのが、当時は学問だった陰陽道に宗教の皮を被せ、神道の一系統に見せかけた方法でしょうか。昨今のフィクションで登場する陰陽師が、このイメージに近いですね」

『関西呪術協会』の元となった組織もこの時に発足したようですと、参事はお茶で喉を潤しつつ付け加えた。

そんな市井に流れた、あるいは以前から市井の陰陽師らの取り締りに、『天社禁止令』が発せられかけたのは、『教部省』の廃止された翌年の一八七二年の事だ。これにより、『教導職』にない術師による陰陽道の流布を禁じようとした訳だ。

それを掬い上げたのが、当初の見込みほどに成果を上げられずに

廃止された『教部省』に代わり、内務省に設置された『社寺局』である。神社・寺院・天理教等この時期に発足した新宗教も含めた全ての宗教関係の行政を司ったこの部署は、神職の養成を目的に民間に『皇典講究所』を設立すると、有栖川宮幟仁親王（ありすがわのみや・たかひとしんのう）を初代総帥に据え、その威光を借りて市井の術師、陰陽師の窓口としたのだ。

『陰陽寮』廃止から実に十二年が経過しての事だ。

「以来、総帥を皇族の御系類、または元皇族が勤められるのは、『神社本庁』となつてからも変わっていません。事実、現在の総帥は陛下の御妹様が勤めておられます」

一般公開用の神社庁のパンフレットを持ち出し、一般『非』公開の情報も織り交せて延々と語る参事も、さすがにここで一息ついた。

その隙を、己の失策を痛感したデユナミスが突いた。

「あー、済まない。神社庁の詳しい来歴については今度にして、今は例の団体について、確認したいのだが」

話の腰を折られたにも関わらず、参事は気を悪くした風も見せず、湯呑みに残った緑茶を飲み干した。

「『関西呪術協会』ですか……。現状なら、そちらの方が詳しいのではないですか？」

競合団体の言葉では、仮に友好的な表現で語ったとしても、何がしかのバイアスが混じるかもしれない。そういうニュアンスが口調には含まれていた。

「いや。こちらの内部告発から、神社庁がどう対応するのか、教えられる範囲で教えてほしい」

麻帆良学園の魔法使い組織『関東魔法協会』が、日本の東西の融

和を目的にネギ少年を特使に仕立て、親書を『関西呪術協会』に届ける。これはフェイト少年から伝えられた報だ。

デュナミスが軽く頭を左右に振って参事の懸念を否定すると、参事も頭を横に振った。

「……何もしません」

「何も？」

回答が意外だったのか、オウム返しに聞き返すデュナミスだ。

「やくざや暴力団や魔法使いじゃあるまいし、よその団体のやる事が気に入らないからと、暴力沙汰起こしてどうするんですか」

さり気なく魔法使いへの隔意を滲ませた参事に、デュナミスは一瞬言葉を詰まらせると、和泉へと視線を向けた。

「警察は民事不介入が原則です。民間の一宗教団体がこの組織に身売りしようが吸収されようが、警察の関与する話ではありませんん」

和泉の返答も冷ややかなものだ。

デュナミスの反応から、参事の言外に隠されたメッセージを受け取れなかったのだとの想像は容易く、参事は一呼吸置いてから補足した。

「まあ、違法行為しているのを見かけたら通報しますけれど、取り締まるのは警察の仕事ですしね」

これで意図は伝わったのか、デュナミスは成る程と頷いた。

神社庁が動かなくとも、交流のある組織や個人が、『関西呪術協会』をそれとなく観察しているという意味だ。何事か異常が起きれば、すぐさま警察に連絡を入れる手筈になっているのだろう。

「通報や令状があればともかく、子供がお使いで運ぶ手紙程度で、警察が保護のために動く事はありません。それに私が所属するのは警視庁です」

二人の視線が向けられると、和泉は少し口早に先程の言葉を繰り返した。

そうは言っても、土地勘のない京都で、行った事もない場所、会った事もない人へ手紙を届けるお使い。九歳の子供に課すハードルとしては少々高すぎる。

そのような歳の子供が、大人の同伴なく街中をふらふらしていれば、外国人と言うのもあり、迷子か家出と判断されて警察官か補導員に保護されるだろう。されない方が京都府としては問題だ。

事実、ネギ少年らの保護は二十六日を予定していても、それまでに問題行動が見られれば、即時対応する手筈になっている。迷子で街中をさ迷うのも、その可能性の一つだ。

「しかし『関西呪術協会』が麻帆良の軍門に下れば、そちらとしても困った事になるのではないか？」

融和とはあくまで名目で、その本質は『関西呪術協会』を『関東魔法協会』の傘下に収める身売りである。

これがデュナミスや霧香、神社庁の共通した見解だ。

さりとて、たかが一団体を吸収合併したところで、他の団体や組織への強制力が得られるはずもない。ましてや『神社本庁』の規模を前にすれば、『関西呪術協会』など吹けば飛んでしまう弱小一族組織ではない。

そんな弱小組織に期待されているのは、当然ながら組織力ではなく、『関西』と冠した名にある。日本を知らない魔法使い達には、

西が東に屈したと、『関東魔法協会』が日本を獲ったと映るだろう。デユナミスとフェイトが来日し、『神社本庁』や他の組織の存在を知るまで、誤解した危機感を抱いたように。

全ては『英雄の息子』のネギ少年に、次代の英雄として箔を付けさせるため。

否、次代の英雄を見出し、抜擢し、導いた偉人として、またネギ少年のもたらす利益を己の功績とし、近衛近右衛門自らの経歴を飾り、さん然と輝かせるため。

そうでもなければ、いかに『関東魔法協会』が近衛近右衛門の私兵団で、『関西呪術協会』が生家だとしても、こつも固執する理由がない。

「まあ、あちらの内部は目茶目茶になるでしょうね。いえ、今でも組織をまとめ切れずに脱会者が相次いでいますか」

京都府における神社の総数は一千八百を少し下回る。その内の一千五百社と少々が『京都府神社庁』の傘下で、九十社弱が『神社本教』、どちらにも属さない五十程の神社は、単立の宗教法人として存在している。

『関西呪術協会』は名前の通り、単立の神社を多数取りまとめている『協会』に過ぎず、神社庁のように被包括宗教法人として傘下に収めている訳でもない。今回の件で、協会の方針に同意できずに離反する神社や陰陽師らの数は加速している。

「それでは、こちらから提供した情報の価値が……」

「それはそれで、有効に活用させてもらっていますよ。……多分、警察が」

やや呆然とした感のデユナミスに同情したか、参事は慌て気味に

最後の一言を付け足すと、こちらにも視線を和泉に投げかけてきた。

「……ですから、私の所属は警視庁です。京都府警が今後どう動くか知りませんが、知っていても教えられません」
「すげなく和泉は返し、温くなった緑茶を一口すすった。」

無論、二十六日に予定されている保護計画が特殊資料整理室の立案なだけに、京都府警で行う一部修正を除けば、大まかな流れは把握している。

それによれば、資料室の出番は霧香の解説で終わり、後は二人の少年少女が無事保護されるのを確認するだけだ。その時の主役は京都府警で、資料室に出張る機会はない。かろうじて、麻帆良で和泉達四人を襲撃した辻斬りが修学旅行に紛れていれば、彼女の身柄の確保も加わると言うところか。

「それはそうと、検察の知り合いからの話ですが……」
「一、二分の間、和泉が口を開くのを待っていた参事だが、待っても無駄と判断したのか、新しい話題を振った。」

「……二十年前、ある事件が例の協会絡みでありましてね。この最近になり、ようやく日の目を迎えられそうだと……」
「この場で持ち出すからには、千草の両親が死亡した魔法世界での戦争の事だろう。」
「デユナミスもそちらへ興味が移ったのか、姿勢を変えて身を乗り出した。」

「良いのですか、検察の話を持ち出して？」
「検察もそれなりに動いているのは、上司の行動範囲から和泉も予想していた。さすがに所属が異なるため詳細は把握していないし、」

霧香からも守秘義務が絡み説明を受けていない。その話が神社庁の片隅で語られて良いものなのかと、一応釘は刺しておく。

「ああ。心配には及びません。二〇〇三年の現時点では、公訴時効が成立している事件ですから。ただ、今回の例の少年がお使いで届けに来る手紙、あれ次第で、時効が無効になる可能性が出てきましたから、それで」

参事の説明で和泉は納得した。

『関西呪術協会』の会長、近衛詠春（このえ・えいしゅん）と麻帆良学園の近衛近右衛門とは、名字からも伺えるように、義理とは言え親子関係にある。『関東魔法協会』の魔法使いが検挙されれば、『関西呪術協会』にも関連組織の疑いで捜査の手が伸びるのは想像に難くないし、そうなるよう計画も立てている。

そこに当時の被害者や遺族から提供される証拠、そして現場から押収される証拠が加われば、事件は継続中となり、時効の無効化も狙えるかもしれない。

ただし、少しばかり誤解もあるようだ。

ネギ少年の手紙は重要ではない。あれば両組織の関係を証明する一助にはなるだろうが、その内容如何に関わらず、『関東魔法協会』の名前が出た時点で、『関西呪術協会』への強制捜査も視野に見えてくるものだ。

「仮に今回が無駄になったとしても、再来年、二〇〇五年一月から改正される公訴時効の延長も検討しているようですがね」

二〇〇三年現在、殺人罪や外患罪など死刑に当たる罪の公訴時効は十五年だ。二十年前の『関西呪術協会』の陰陽師が多数死傷した

事件は、参事が述べたように時効が成立してしまっている。

しかし二〇〇五年を目処に改正が検討されている内容では、時効は二十五年に延長となる予定だ。これにより二年後の二〇〇五年には事件から二十二年、ぎりぎり時効の範囲内に収まる。

以前は煮え湯を飲まされた遺族らが奮起するのも頷けよう。

もっとも、一年半以上も先の法律改正に期待するのではなく、間近に控える好機をものにする方が望ましいのは間違いない。

「そういう訳で、警察の人達には色々期待しているのですよ、こちらは」

神社庁としてか個人としてか、参事は明言しなかった。

「ほう、迂闊に動けば即逮捕、動かなくても時間の問題。二段構えの備えか。これは期待できそうだな」

面白そうだと言いたげに、デュナミスは喉の奥で笑いを漏らした。

「……何度も言いますけれど、私の所属は警視庁です。京都での出来事には関与できませんし、何か計画があるとしても関知するところではありません。まして、部外者に口外する事も出来ません」

三度目の説明を繰り返しながら、中途半端な情報漏洩を仕出かした検察に、和泉は内心で恨み事を呟いた。

『関西呪術協会』絡みなどの事件なのか明言していないせいも、壮絶な誤解が発生しているようだ。

二十年前の千草の両親が死亡した事件は、経緯はともかく、国外で発生した事件だ。しかも日本との国交がなく、紛争地帯どころか戦場となっていた国での話である。

人道的な意味では協会も責任があるにしても、刑事的な意味で事

件として取り上げる事は叶わない。それは二十年前も現在も、二〇〇五年の法律改正があっても変わらない。

協会からの命令とは言え、当然拒否権はあつただろうし、危険を知らずに向かったとも考えられない。あくまで自己責任であり、恨み辛みを並べ立てるのであれば、その対象は自分達に向けるか、せいぜい許容されるのは戦争を行っていた国に対してだろう。魔法使い全体や協会への反発は、それこそ逆恨みの領域だ。
千草に面と向かつて言えない和泉の本音に近い部分だ。

「……頭の痛い話ですね……」
二十年前の事件を俎上に載せるのは、おそらく不可能に近いだろう。

無論、参事の語る事件と、和泉の想像する事件が同一と言う保証はない。

この推測が正しい場合、期待に胸を膨らませる参事の失望が見えてしまうだけに、聞かなくても良い話を聞いてしまったと、和泉は密かに後悔した。

第七話 関西呪術協会（後書き）

参考資料

あおたけ掲示板『京都府神社界の動向（神社本庁と神社本教）』
2005年7月15日

<http://6531.teacup.com/hiroshitagashira/bbs/246>

京都府神社庁『京都府神社庁とは』

<http://www.kyoto-jinjacho.or.jp/info.html>

神社本庁

<http://www.jinjahoncho.or.jp/index.html>

西野神社 社務日誌『神社庁』2006年6月25日

<http://d.hatena.ne.jp/nisinojinnjya/20060625>

西野神社 社務日誌『神社本庁』2005年10月18日

<http://d.hatena.ne.jp/nisinojinnjya/20050805>

西野神社 社務日誌『神社本庁以外の神社神道の包括団体』2006年6月25日

<http://d.hatena.ne.jp/nisinojinnjya/20061018>

Wikipedia『陰陽師』

<http://pttl/cnz3.wikipedia>『陰陽寮』

<http://pttl/Hdgx.wikipedia>『教導職』

<http://pttl/Nnmb>

Wikipedia「教部省」
http://ptl/CSOA

Wikipedia「公訴時効」
http://ptl/TaCZ

Wikipedia「皇典講究所」
http://ptl/SBCO

Wikipedia「國學院」
http://ptl/MGpk

Wikipedia「社寺局」
http://ptl/7awg

Wikipedia「神祇省」
http://ptl/m5Gi

Wikipedia「神社本教」
http://ptl/Kmc8

Wikipedia「単立」
http://ptl/2DG4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8944u/>

腐敗都市・麻帆良

2011年10月28日01時05分発行